

応用心理学の クロスロード



Vol. 05

2012. December

○特別企画

座談会 | 日本応用心理学会の昨日から明日へ

応用心理学の専門分野？

タイトルにあげた“応用心理学の専門分野”という表現をみて、おや、何のことと言っているのかな？と疑問をお持ちになった先生方が多いと思います。そもそも応用心理学は、心理学の各専門分野の知識をいかに現実の社会に適用し、社会の発展に貢献するか、が問われるわけで、そこにおける専門性といわれても、何を言っているのかと思いあぐねてしまうかもしれません。もちろん心理学の現実社会における応用場面という視点からみますと、現在、日本応用心理学会で、おおいに研究されている交通場面や看護場面、さらには産業や臨床や犯罪という社会的場面があります。しかし、これらが応用心理学の専門分野かというと、それぞれ交通心理学や産業心理学、臨床心理学という専門の分野があり、それを専門とする学会があり、そこでも専門的に研究がすすめられています。となると、応用心理学の専門性、他と異なる独自の専門分野とは何かということに立ち帰ってしまいます。

そんな変なことを考えたのは、先日、藤田理事長と日本心理学諸学会連合の理事会に出席したときのことです。当日のメインテーマは、国家資格を目指す心理師の大学院修士課程の共通カリキュラムに関する件でした。諸々の専門の心理学会の理事長・会長が、暑い夏にも関わらず、収まりどころもない議論を3時間もくりひろげていたときのことです。カリキュラムは基本となる7つの柱が示されました。その第一は心理学に関する科目です。これに異論を唱える人はいません。問題となったのは、そこに例としてあげられた科目名です。正確にいうと、例としてあげられなかった科目です。科目名があげられている学会の長は何も言いません。あげられなかった科目的関連学会の長は、なぜ自分の学会の科目名をあげてないかと熱弁を始めました。執行部はこれは単なる例だと説明していましたが、それでは收まりません。あげられている科目名は少なく、あげられていない諸学会の長が次々とその重要性を、いわば我田引水的に発言するのでエンドレスで、しかも一方的主張ですので、收まらないのです。

なにしろ、国家資格、心理師の後に（ ）して、臨床とか発達とか専門と明示するということですので、各学会については、実に大事なことです。

その熱弁を聞きながら思ったのが、では応用心理学はどうなのだろうか、と思ったのです。心理師（応用）では、何か疑問符がつきそうな感じがします。では、応用心理学のプロパーの専門性は何か、ということになってしまいました。どうでしょう。日本応用心理学会の先生方、一緒に考えてみていただけませんか。

齊藤 勇

さいとう・いさむ●立正大学心理学部教授。文学博士。1943年、山梨県生まれる。早稲田大学院文学研究科心理学専攻博士課程単位取得退学。1972年以降、立正大学に40年余勤める。大学では、2002年に心理学部創設、2011年に心理学部に対人・社会心理学科を新設することに努力する。専門は、社会心理学、対人心理学、著書に『恋愛心理学』『見た目でわかる外見心理学』（ナツメ出版）『イラストレート人間関係の心理学』『日本人の自己呈示の社会心理学的研究』（誠信書房）等がある。



CONTENTS

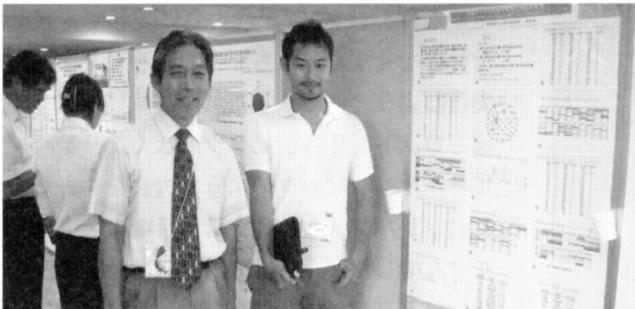
巻頭言	応用心理学の専門分野？ 齋藤 勇	1
特集	日本応用心理学会 第79回大会報告	3
	大会委員長からの報告 第79回大会を終えて 濱保久 4	
	参加院生からの報告 ①柔軟性に富んだ大会 谷本郁子 7	
	②初めてのポスター発表を終えて 中島安紀子 8	
	③大会初参加を終えて 佐藤潤美 9	
	本誌広報委員からの報告 北の大地での熱意溢れる大会 軽部幸浩・木村友昭 10	
	第80回記念大会にむけて 大会委員長の挨拶 藤田主一 11	
特別企画	藤田理事長×名誉会員の座談会「日本応用心理学会の昨日から明日へ」	12
ホープ登場 クロスロードの星		
⑯安原久美子 [帝塚山大学] 18	⑯田山允俊 [関西国際大学] 20	
⑰中井由可子 [西日本高速道路エンジニアリング関西㈱] 22		
東日本大震災研究助成報告		
①子どもたちの未来を支える 藤森立男 24	②コミュニティの力 村上裕子 26	
③つながりをつくる支援——京都の家プロジェクト活動報告 宮下英美子 28		
大学探訪	研究室におじゃましました 帝塚山大学心理学部 蓮花一己	30
職場探訪	九州大学大学院医学研究院 臨床看護学研究室 川本利恵子・中尾久子・宮園真美・木下由美子・金岡麻希	33
CROSSROAD ESSAY 私と応用心理学 ⑤		
私と応用心理学～心理学研究のwell-beingを目指す 大坊郁夫	36	
BOOK REVIEW 本を出しました		38
大村政男『新編 血液型と性格』／山口創『手の治癒力』／藤森立男『復興と支援の災害心理学』 ／藤田主一『ゼロから学ぶ経営心理学』		
心理学から見たおすすめDVD紹介 『NUMB3RS 天才数学者の事件ファイル』 桐生正幸	40	
特別寄稿 F・E・フィードラーの履歴、業績および思い出（その3）白樺三四郎	41	
応用心理士の現場 到達目標をしっかりと定め、成果を確実に出す 石橋里美	45	
◆日本応用心理学会認定「応用心理士」資格認定申請のご案内	47	
常任理事会通信		
◆機関誌編集委員会からのお知らせ 48	◆日本応用心理学会入会案内(申込書) 49	
◆編集後記 50	◆原稿募集 51	

会員統



日本応用心理学会 第79回大会

特集



第79回大会を終えて

はじめに

日本応用心理学会第79回大会はロンドンオリンピックの余韻がまだ残る中、9月22日（土）、23日（日）の日程で札幌近郊にある北星学園大学で開催されました。

大会開催校は、オリンピックでいえば開催国のようなものです。しかし、北星学園大学には本学会の一般正会員が2名しかおらず、華々しい大会を企画するのは端から無理なことありました。少々ずるい考えかもしれませんのが、華やかな部分は80回記念大会に委ねて、我々は背伸びをせず自分たちで今できることを誠実に実行しようと考えました。オリンピックでいえば、ロンドンオリンピックでなく、リレハンメル冬季オリンピックのような大会をめざしました。リレハンメルの大会は派手な大会ではありませんでしたが、各国のプレスの評判はかつてないほど高評価がありました。それは、何かをお願いしたときに担当者は即座に「ノー」と言うことなく駆けぎりまわって努力をし、万が一希望に沿えなかったときには本当に申し訳なさそうな顔で「ごめんなさい」と対応していたからだ、と一種の伝説になっています。第79回大会に準備委員会なるものは存在しません。大会委員長と事務局長がいるだけです。大変といえば大変ですが、しかし、だからこそ小回りが利くというメリットもありました。それを最大限に生かして、参加者の皆様が気持ちよく過ごしていただけるような2日間にしてしまうことを考えて1年間やってまいりました。2名でできることには自ずと限度がありますので、基本的にプログラムはスリムでシンプルなものにしておき、個々のご要望があれば、できるだけそれに沿うよう柔軟に対応するというコンセプトで進めてまいりました。たとえば、ポスター発表

は会場の関係から初日午後ののみの設定とし、また、プログラム編成の単純化からパラレルセッションを避けたプログラムを基本としながらも、個々のご要望にはすべてお応えしてまいりました。その結果、見た目が変則的なプログラムになってしまったとしても、それで誰かが不利益を被るのでなければ一向に構わないと考えました。

以下に本大会の概要をご報告させていただきますが、おそらく大会史上に残るコンパクトなものではあると思います。これを読んで、「ああ、こんなことならうちの大学でも引き受けられそうだな」と感じられる先生がお1人でも現れたならばこの報告の意味も少しはあったということになりますね（笑）。

大会の概要

1) 大会準備

- ・開催受諾：2010年前期にサバティカルでミュンヘンに滞在していた私のところに1通のメールが届きました。2012年の大会開催校の打診です。学科に相談したところ、学科として受けすることはできないが、教室・備品などの協力は惜しまないということでしたので、大恩のある日本応用心理学会への最後の恩返しとして引き受けを決めました。

- ・会期決定：当初、他学会とのバッティングを避けるため7月開催も考えましたが、結局はこれまでの例に倣い9月開催となりました。事前に日本心理学会の開催時期調査を行い調整しましたが、想定内とはいえた結果的に日本グループ・ダイナミックス学会の年次大会と日程が重なってしまい一部の先生方にご迷惑をおかけしました。今後、秋以外の開催を視野に入れる必要もあるうかと思います。

- ・会場予約：会場はできるだけコンパクトに配

置することを意識しましたが、ポスター会場だけは発表を一気に捌けるよう大きな会場（大学会館）を手配しました。

・役割分担：前述のように準備委員会を組織しない異例のやり方だったものですから、豊村事務局長とわかりやすく役割分担をし、豊村先生には大会企画シンポジウムの企画、運営をお願いすることにいたしました。その結果、顔を突き合わせる会議の必要はなくなり、主にメールによる“報連相”（報告・連絡・相談）だけで事足りました。これはかなり効率的であったと思います。大会関連事務については第78回大会同様、国際文献社に外注することにしました。国際文献社（担当：鈴木氏）のサポートがなければ大会開催は不可能だったと思います。当日の運営スタッフは会計責任者1名を除き、濱ゼミ3年生で担当することにしました。12名と少ない人数ではありますが、時間帯によって担当をシフトすることで何とか対応できると考えました。また、少ない人数でやりくりするために、地下鉄駅から会場までの案内を人から等身大パネルと道しるべに切り替えたり、ポスター発表の受付を省略したりと多少工夫しました。ただ、スタッフ全員が大会というものを全く経験したことがない学部生であるためにイメージの共有とトレーニングが最大の課題がありました。しかし、ゼミ生だけで賄うことのメリットは毎週のゼミで簡単な打ち合わせをしたり、準備・訓練合宿をしたりするのが比較的容易であったことです。何かの行事を成功させる鍵は、予算を除けば物の管理、時間の管理、人の管理だと思います。物の管理と時間の管理は、ほぼ個人の努力と段取りに依存していますが、人の管理は相手があってのことです。簡単にはまいりません。しかし、今回は新入ゼミ生だけで構成したことが結果的にはいい方向に作用したように思います。彼らは時間を追うごとに凝集性の高い集団に成長してまいりました。違った観点からみれば、この大会のおかげで今後1年半のゼミ活動の基盤は非常に強固な形で完成したともいえ、その副産物には大いに

感謝している次第です。

2) 大会データ

- ・大会参加人数：予約236名、当日44名。今大会では学会本部の若手研究者支援以外にも大会独自の支援を追求した結果、会員・非会員、予約・当日にかかわらず学生さんの参加費を一律2,000円と安価に設定することにいたしました。その結果、正会員の先生方に多くの教え子さんを連れてきていただくことができました。ありがとうございました。

- ・研究発表件数：自主企画ワークショップ7件、ポスター発表116件。

- ・総会予約参加人数：109名。

- ・懇親会参加人数：予約89名、当日25名、大会招待8名の合計122名。

3) 大会企画

当初から大会企画としてはシンポジウムと、あと予算的に可能なら企画講演くらい的を絞って考えておりました。最終的に今大会では「病気の不確かさ理論」という企画シンポジウム1本に絞ることにいたしました。企画は豊村事務局長と豊村ゼミの卒業生で江別すずらん病院看護部長の滋野和恵氏が担当し、話題提供者としては北海道医療大学看護福祉学部長の野川道子氏を軸に、北海道医療大学の高木由希氏、香川大学の金正貴美氏、京都大学大学院の鈴木真知子氏にお願いすることになりました。慢性病の患者が感じる、仕事、生活、家族など様々な事柄への不確かさに焦点を当て、そのような患者をどのように適応に導くことができるのかを多くの実践例を通して紹介していただきました。会場には道内医療関係者（非会員）の姿も見られ、地域医療に対しても一定の貢献がなされたように思います。

4) 自主企画ワークショップ

紙面の関係上お名前は記しませんが、「青年期のキャリア形成とその支援について考える」「アンガーマネジメントの有用性について一幅広い分野での活用をめざしてー」「ボディワークとリラクセーション～カラダとの対話～」「中学校武道必修化を契機としたインクルーシ

ブ教育の実現に向けて」「スポーツの心理を追求する—トップアスリートの世界—」「アニメを用いた紛争解決教育」「血液型による性格判断を信じる人がなぜ多いのだろうか part V」の7つのワークショップが行われました。なお、本大会では日時指定をされないワークショップに対しては、企画費と研究発表費免除の優遇措置を設けており、その対象となった3件のワークショップから大いに感謝されました。

5) ポスター発表

介護・福祉領域で4件、臨床・相談領域で9件、看護領域で12件、矯正・非行・犯罪領域で6件、検査・測定領域で5件、交通領域で7件、産業・職業領域で20件、社会・文化領域で17件、人格領域で11件、認知・感情領域で8件、発達・教育領域で13件、その他の領域で4件の発表がありました。

6) 研修会

研修会Aでは、駒澤大学の谷口泰富先生の司会で日本大学名誉教授・MOA健康科学センター顧問の山岡淳先生が「全人的心理学を目指して」をテーマに熱弁を振るわれました。長年、日本の心理学会の動向を見守ってこられた山岡先生としては、近年のあまりにも細分化された心理学の現状に警鐘を鳴らさないわけにはいかなかったのでしょう。研修会Bでは、中京大学の尾入正哲先生の司会で流通科学大学の蜂屋真先生が「心理的財布とは何か」というテーマで消費者行動分析の強力な武器となり得る心理的財布の紹介を実証的かつ理論的にしてくださいました。

7) 懇親会

参加費用を抑えたこともあり（一般会員予約4,500円、学生会員予約4,000円）予約時点で89名に上る申し込みをいただきました。会場はホテルではなく学内の食堂を利用し、「学園祭」をイメージした懇親会にしようと考えました。豪華な見栄えのする料理を準備するかわりに、私が30年前に来道してから今日まで口にしたものの中から美味しいと思えたものだけを少量ずつ提供する方式を採用しました。ラーメ

ンや生ビール、フランクフルトの屋台では先生方に並んでいただくなどご無理も申しましたが、第78回大会の優秀大会発表賞の授賞式や名誉会員の先生方へのインタビューなど和気あいあいの雰囲気の中で楽しい時間を共有することができたと思っております。

8) 総会

今大会では新しい投稿システムが提案され承されました。従来の方式から電子投稿・査読方式へと移行することによって審査過程の可視化とスピードが実現します。

9) 理事会・常任理事会

理事会は大会前日9月21日（金）の15時から17時まで開催され、その後、場所をシェラトンホテル札幌に移し理事懇親会を開催しました。理事会には37名、理事懇親会には36名の先生方に参加いただきました。また、常任理事会は、大会2日目9月23日（日）の11時45分から13時15分の時間帯で開催しました。

おわりに

大会を終えた今、何とか無事に第80回大会にバトンを繋ぐことができてホッとしております。大きな学会の大会委員長は初めての経験で戸惑うことも多くございましたが、その都度適切なアドバイスを下さった歴代大会委員長・事務局長の田中真介先生、内藤哲雄先生、長谷川孝治先生、また、学会の前・現理事長と前・現事務局長をはじめ常に温かく見守ってくださった常任理事の先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。



はま・やすひさ●現在、北星学園大学文学部心理・応用コミュニケーション学科教授。学部では、コミュニケーション心理学、産業心理学、プレゼンテーション演習、フィールド実習（産業系建築）などを担当。大学院では社会心理学研究Ⅰ、Ⅱなどを担当。専門はコミュニケーションに関わる心理学全般。現在の関心は、モノの作り手と消費者のコミュニケーションを回復し、わが国にモノ作りの魂を取り戻すこと。

柔軟性に富んだ大会

このたびは日本応用心理学会第79回に参加させて頂き、誠にありがとうございます。今大会の感想を、北星学園大学の濱先生のお言葉をお借りするならば「えらいこっちゃでございます」の一言に尽きます。まず、このような機会を与えて頂き「えらいこっちゃでございます」。

私は「ボンド理論における4要素の検討—犯罪心理学の観点からの再構築—」という非行防止についてポスター発表させて頂きました。昨年の信州大学で行われました第78回大会でも、同じくボンド理論についてポスター発表をしました。昨年は学会に行くのも初めてなら発表も初めてで、日本応用心理学会が私の学会デビューでした。まだ見ぬ学会というものに対して、堅苦しく窮屈なイメージを持っていました。「相手に伝わるように説明できるだろうか?」や「誰からもまったく相手にされなかつたらどうしよう」など、不安の種は尽きなかったのですが、いざ会場に行けばそのような考えは払拭されました。昨年度も今年度の大会も様々な分野の先生方が、ご自身の専門分野からの意見をわかりやすく熱心に教えてくださいました。

今大会は二度目の日本応用心理学会でのポスター発表ということもあり、のびのびと大会を楽しむことができました。惜しむらくは、2日目の大会の日程と就職試験が重なって、2日目の大会に参加できなかったことです。来年度は就職しても、学会に参加したいと考えています。贅沢な願いですが、学会発表や参加を許容してくれる職場に出会いたいと思っています。

大学院生になり、学会、特に日本応用心理学会に参加することが楽しみとなりました。各分野に特化した学会は興味があるものばかりで、それはそれで興味深いのですが、日本応用心理学会のように様々な分野の研究を知り、また違う分野領域の方からアドバイスを頂いたりすることは財

産です。自分の興味のある分野領域ばかりに向き合うだけでは視野が狭くなり、思考の広がりが狭くなりがちです。様々な心理学の分野の方々と交流することで、自分の研究テーマの立ち位置、求められていることなどを整理するとても良い機会であるとともに、心理学全体の可能性を垣間見られる気がします。

昨年の第78回大会では、同期の田山允俊くんのポスター発表「江戸時代の犯罪者プロファイリング—長崎犯科帳を使用した殺人犯罪情報分析—」が優秀大会発表賞を受賞しました。今大会の授賞式には出席できませんでしたが、私も連名発表者として名を連ねており、賞状を頂き「えらいこっちゃでございます」、否、驚きと嬉しさでいっぱいです。私は心理学に付き物の統計学が苦手ですが、大学院に入ってからは敬遠していた統計を初步から学び直し奮闘中です。多岐にわたる心理学の分野に触れる機会がある日本応用心理学会から刺激を受けたのかもしれません。

最後になりましたが、若手研究者を温かく伸ばしてくださる日本応用心理学会のますますの発展を願っております。



たにもと・いくこ ● 2006年帝塚山学院大学人間文化学部人間学科卒業。大学在学中は小田晋先生に師事する。2011年関西国際大学大学院人間行動学研究科犯罪心理学コース入学。現在、桐生正幸先生の下でハーシのボンド（社会的絆）理論を研究中。荷物になるのにぬいぐるみ持参で公式行事に参加。尼崎地区BBS会事務局長を務める。



友人とポスター発表の最終チェック

初めてのポスター発表を終えて

このたび、日本応用心理学会第79回大会にポスター発表という形で参加させて頂きました。今回は院生という立場から、今大会で感じたことを紹介させて頂きます。

私自身は学会参加経験が少なく、学外でポスター発表をするということが初めてで、当日は質問にきちんと答えられるだろうかと柄にもなく緊張していました。ところが始まってみると、見に来てくださった先生方から、研究に対する多くの貴重なご意見や今後の研究への激励のお言葉を頂き、時間はあつという間に過ぎていきました。自身の研究の方向性がまだ曖昧で、とにかくいろいろな先生とコミュニケーションをとろうとしただけだった昨年の大会に比べ、今大会では実りあるやりとりができた気がします。

学会という場は、初めて参加するまでは大学の先生や院生などの研究者だけが参加するものだというイメージでした。ところが日本応用心理学会は、就労しながら研究されている方の参加も多く、多岐にわたる研究に触ることができます。私は産業組織の領域で、「職務要因とモチベーションおよび組織市民行動」といったテーマで発表をしました。専門の先生方のお言葉はもちろんですが、普段接することのできない実際に人事を担当されて働いている方やモチベーションの新たな尺度作りに取り組んでいらっしゃる方々とお話しして新鮮な発見があり、今後の研究に向けて本当に勉強になりました。

そして、私の場合は学士課程と修士課程で違う大学に通っているので、このような大会で昔の恩師や仲間に再会できるのも楽しみの1つです。学士課程の担当教授にポスター発表することは、自身の成長を見せたいという思いから一番緊張していたかもしれません。また、昔の仲間の頑張っている姿を見ると「自分も負けていられないな」という気になり、修士論文に向

けての良い刺激となりました。

今大会では、「心理的財布とは何か」をテーマとした研修会にも参加させて頂きました。最近は、学校でも修士論文に向けての研究に関する勉強ばかりになり、領域外の研究のお話を聞くという機会がめっきり減っていましたので、楽しく拝聴しました。こうやって大会で先生方の研究へのアプローチ法や考え方を学ぶことは、とても勉強になると改めて感じました。

懇親会は趣向が凝らしており、非常に楽しい時間となりました。懇親会は本来、大会に参加した方々と交流する場と思っていたのですが、北海道の数々の名物料理の魅力に負け、しっかりと席に座り食事に集中してしまいました。先生方や学生が同じように料理に並ぶ姿はとても微笑ましく、思わず学会だということを忘れてしまいそうでした。

私は来年の4月からは就職することが決まっており、なかなか今までのように研究していくことは難しくなると思います。しかし、しばらく発表はできなくても大会には参加し続け、これから多くのことを学んでいきたいと思います。最後になりましたが、今大会を運営して頂いた実行委員とスタッフの方々に感謝の意を申し上げます。そして、日本応用心理学会のさらなる発展を願います。



なかしま・あきこ ● 2011年帝塚山大学心理福祉学部心理学科を卒業。同年4月より、中京大学心理学研究科応用心理学専攻修士課程に在学中。大学入学前の就労経験から、企業における従業員のモチベーションに影響を与える要因について興味を抱く。現在は、組織市民行動という観点から、従業員のパフォーマンスやモチベーションとの関連についての研究を行っている。

大会初参加を終えて

このたび、北星学園大学にて行われた日本応用心理学会第79回大会に、ポスター発表で参加させていただきました。私にとって、今大会は日本応用心理学会への初めての参加であり、お会いしたことのある先生方も少なかったことから、大変な緊張で臨むこととなりました。

日本応用心理学会は、多岐にわたった研究発表が魅力の一つとうかがっていましたが、会場に着き、実際にたくさんのポスターを目の当たりにすると、その光景にすっかり圧倒されてしましました。これだけの発表があると、私のポスターには誰も足を止めていただけないのではないかと不安に思いましたが、その反面、他の学会ではなかなか話の聞けない領域について勉強する機会だと考えると、興奮を覚えました。この興奮を原動力として、様々な方の発表を聞きに行かせていただきましたが、どれも興味深く、新しい発見のあるものばかりでした。特に看護領域の発表に関しては、発表者の方が実際に現場で働いていらっしゃる場合が多く、実体験も織り交ぜたお話を聞くことができて、大変勉強になりました。この点は、これまでに参加した学会と大きく異なっていたように思います。

発表者側としては、独身者に対する差別が生じるメカニズムについて検討した内容を発表いたしました。拙い発表ながら、多くの先生方に足を止めていただき、ありがたいコメントを頂戴することができました。お話をすると中で、“なぜ独身者差別というテーマを選んだのか？”という質問を多くいただきましたが、アカデミックな背景だけでなく、私個人の経験から先生方の経験談まで、形式ばらないお話をさせていただけたのは、会場内の雰囲気がとても温かかったためだと思います。

この他にも、大会企画シンポジウムとして行われた「病気の不確かさ理論」のご講演は、大



発表者として

変印象に残りました。講演を通じ、先の見えない不安と闘いながら生活する患者さんと、そのご家族の苦悩を改めて認識いたしました。私事ですが、今大会直後、祖父が脳梗塞を起こし、半身に麻痺症状が残っています。現在、症状が悪化しないか、脳梗塞が再発してしまわないか、といった様々な不確かさに直面していますが、講演内容を家族にも話し、反芻しながら前向きに対処しております。今改めて大会を振り返ると、不確かさ理論に限らず、心理学が私たちに寄り添った学問であることを実感いたしました。

多くの価値ある経験をさせていただき、本当にありがとうございました。来年度もぜひ参加させていただくべく、日々の研究活動に邁進して参りたいと思います。



さとう・ひろみ ● 1988年東京都に生まれ、岩手県で育つ。2011年東北大学文学部人文社会学科を卒業。2012年東北大学大学院文学研究科博士前期課程に進学する。研究テーマは、非生得的な要因に基づく偏見、差別に関する検討。現在は主に独身者差別について研究を行っている。今後は、独身とは別の非生得的な要因（喫煙習慣）に基づく差別などについても検討しようと考えている。

北の大地での熱意溢れる大会

北の大地は北星学園大学で、第79回大会が開催されました。朝晩はとても涼しく日中は多少暑さを感じましたが、2日間を通じて天気に恵まれました。地下鉄大谷地駅1番出口の階段を上りきるとすぐに『ようこそ応心へ』の案内があり、その横には「応心」と書かれたかわいらしい案内が道標として道のあちこちにひっそりと置かれており、それを頼りに歩いていきますと大学までたどり着けました。キャンパス内でもA館と大学会館のために道標がありました。

受付ならびにワークショップ会場はA館7階で、またポスター発表と懇親会は大学会館で行われました。

今回の大会は、大会企画シンポジウム「病気の不確かさ理論」、自主企画ワークショップが7件、研修会が2件ありました。2件の研修会は、山岡淳先生の「全人的心理学を目指して」と蜂谷真先生の「心理的財布とは何か」でした。

ポスター発表は、一昨年前より行われている優秀大会発表賞への投票もあり、熱のこもったプレゼンテーションが各所で見られていました。ポスター会場は、広々としており、討論しやすい雰囲気でした。

大会初日の総会では、2組の学会賞の授賞式が行われました。懇親会では、大会委員長の濱保久先生が、「懇親会は学園祭をイメージした手作りです」と話されたとおり、学生2人の言



道するべ



大会発表優秀賞投票箱

葉の掛け合いをしながらのすばらしい司会でとても楽しくなごやかな雰囲気で会が進行し、フランクフルト屋台、じゃがバター、塩辛、山頭火のラーメン、イクラ・カニ丼、道産赤肉メロンと北海道ならではの味覚を参加者の方々は堪能されたことでしょう。また、帰りにはロイズのお土産まであり、いたるところに大会関係者の方々の心温まる優しい気持ちが溢れていた、そんな懇親会でした。

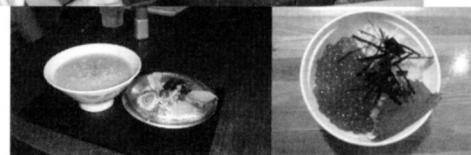
その懇親会で、来年の第80回記念大会が開催される日本体育大学の関係者の皆様から挨拶があり、さらに大学紹介の映像が映し出されました。会員の皆様におかれましては、ふるって第80回記念大会にご参加くださいますようお待ち申し上げております。



ワークショップの様子



懇親会の事前準備の様子



大会委員長の挨拶

2013（平成25）年の日本応用心理学会第80回大会は、日本体育大学（通称：日体大）で開催させていただきました。会期は9月14日（土）～15日（日）、会場は本学の東京世田谷キャンパスです。大会が都区内で開催されるのは2006（平成18）年の第73回大会以来、また体育・スポーツ系大学学部で行われるのは1950（昭和25）年の第9回大会以来です。交通手段は幾通りかありますが、最寄り駅はJR渋谷駅から東急田園都市線で9分の桜新町駅です。桜新町はサザエさんの町として知られ、町のあちこちにキャラクターの像やポスターが飾られ、またどこからともなくあのメロディーが流れてきます。キャンパスまでの途中に長谷川町子美術館もあります。

日本応用心理学会（略称：応心）の第1回大会は戦後間もない1946（昭和21）年ですから、63年間に80回の大会数を重ねることになりますが、年数と回数とのズレは第24回大会まで年に2回の開催があったためです。いずれにしても80回という節目の回数は高名な諸先生が培ってきた賜物です。そのような経緯もあり、本大会を記念大会と位置づけました。

日体大は体育・スポーツの伝統実績が豊かな大学です。日本がオリンピックで獲得したメダルの4分の1は、日体大関係者の活躍によるものです。せっかく記念大会を日体大で開催しますので、「体育・スポーツと応用心理学」に関わる記念講演やシンポジウムを企画したいと思います。また80回を記念するシンポジウムなども企画する予定です。詳細につきましては、後日大会ホームページと大会通信でお知らせいたします。もちろん研究発表、自主企画ワークショップ、研修会、会員総会、懇親会などのプログラムは従来と同様です。優秀大会発表賞への投票もあります。なおワークショップへの登壇は1人複数回を認めたいと考えています。懇親会会場は、渋谷駅周辺を予定しています。



迫力満点エッサッサ！来年はこれが見られるゾ

ので多数ご参加ください。懇親会では日体大伝統応援スタイルであるエッサッサの迫力満点の実演を計画しています。大会期間中は多彩なプログラムを用意しておりますので、どうぞご期待ください。

日体大の心理学系研究室は、長田一臣名誉教授を中心にスポーツ心理学、教育心理学を核として発展してきました。長田名誉教授と円田善英名誉教授が退官された後、現在は西條修光教授、黒田稔教授、楠本恭久教授、藤田主一教授、齊藤崇准教授、宇部弘子准教授、齋藤雅英准教授、高井秀明助教、川端美紀助教、本間悠也助教が研究と教育にあたっています。記念大会では、応心会員でもある専任教員と大学院生が大会実行委員として皆様をお迎えいたします。9月中旬はまだまだ残暑厳しい季節ですが、記念大会が皆様の研究の場、交流の場としてお役に立てるようスタッフ全員が精一杯務めさせていただきますので、どうぞ多数の皆様のご参加をお待ち申し上げます。



ふじた・しゅいち ● 1950年新潟県に生まれる。1982年、日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程満期退学。城西大学経済学部講師、城西大学女子短期大学部助教授、同教授を経て、2005年日本体育大学教授。現在、日本応用心理学会理事長。応用心理士、臨床心理士、学校心理士。応用心理士は1995年に第4号取得。専門は教育臨床心理学。

特別企画

日本応用心理学会の 昨日から明日へ

日本応用心理学会理事長
日本体育大学教授

藤田主一



藤田新理事長からの挨拶

このたび、会員の皆様からのご推举により理事長の重責を担わせていただることになりました。歴史と伝統のある本学会をさらに魅力ある学会へ発展させるため、皆様とともに邁進していきたいと存じます。微力ではございますが、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

さて、本学会広報誌『応用心理学のクロスロード』は、以前に発行しておりました「ニュースレター」の掲載内容に加え、本学会や日本応用心理学に関わるさまざまな情報を盛り込んだ新しい広報誌です。いわば第二の機関誌といってよいでしょう。第1号の発行は2010年6月で、前

理事長森下高治先生のご英断と前広報委員長藤森立男先生の企画力によって実現したものです。第4号までは年間2冊を発行していましたが、第5号からは年間1冊の発行になります。『クロスロード』の第1号と第3号には「特集：対談」というコーナーを設け、各界の著名人と理事長との対談の様子が掲載されています。第1号では五輪メダリストの山本博氏、第3号では宇宙飛行士の山崎直子氏が登場しています。皆様はご覧になられましたか。いずれも有意義な対談として好評でした。

第5号では、このコーナーを「座談会」に趣を変え、本学会名誉会員でいらっしゃる大村政男先生、荻野七重先生、玉井寛先生の3名の先生をお招きして、本学会の想い出やご提言、応用心理学への熱い思いなどについて新理事長を交え語っていただきました。なお、司会は現広報委員長の浮谷秀一先生にお願いしました。

■ 日本応用心理学会との関わりを振り返って

浮谷○日本応用心理学会の過去を振り返りながら、今後のことを見展していきたいと思います。まずメンバーの方を紹介します。大村先生は名誉会員になられて15年を超え、今でも精力的に研究発表を続けられて当学会に各方面から貢献をしていただいている。荻野先生は長年事務局長と副理事長を歴任されて当学会に各方面から貢献されて名誉会員になられています。玉井先生は大会事務局長をはじめ、陰になり日向になり学会にいろいろ貢献していただき名誉会員になられます。それから藤田先生は今期から理事長として、少なくとも3年間は学会の指揮をしていただきます。最初に、大村先生から資

料をご用意いただいているので、日本応用心理学会の歩みをお話をいただけるかと思います。

大村○私が積極的に「応心」と関係したのは、復興第1回の大会のときからです。そのときは空襲で焼け野原の中にぼつんと残った日本大学本部・図書館の建物で復興第1回の大会をやり、私は受付をしました。当時は受付はたった1人でした。厚い本の背表紙に金文字で入った先生方の顔を直に見たときは感激しました。それから以後ずっと事務局を勤めていました。大会が年2回あったから多忙でした。

荻野○私が日本応用心理学会に入ったのはとても早く、だから会員番号も3桁の500番台です。でも、その後は長い間全然関わっていなかつたのですが、白梅学園で大会を開かないかとい

座談会

日本応用心理学名誉会員
日本大学名誉教授

大村政男

日本応用心理学名誉会員
白梅学園短期大学名誉教授

荻野七重

うお話が来て、白梅で第59回の大会を1992年にしました。その時に大会委員長、会長を1年間努め、日本応用心理学会と深く関わるようになりました。その後、日本応用心理学会の事務局長をお引き受けし、理事会にも出させていただくようになりました。日本応用心理学会の先生方はいい方ばかりで家族のように温かくて、私は幸せな事務局時代を過ごさせていただきました。

玉井◎私も会員になったのが比較的早かったです。先輩の先生方の指導を受けながら、学会発表をしていました。90年代になってから、発表だけでなく監査役を、そしてその後に応用心理士の認定委員になりました。私は今の福島学院大学に2002年から行つたのですが、2005年に第72回大会を福島学院大学でやらせていただきました。大会委員長を星野仁彦、事務局長を私がやり、皆様方のご協力のもとに無事に大会を終えました。私は学会は、日本応用心理学会の他には日本心理学会が最初ですが、アットホームな大会の雰囲気が気に入り、その後は産業組織心理学会や社会心理学会、日本応用心理学会にのめり込んでいき、今日まで至っています。

藤田◎私はもともとは心理ではないのですが、心理をやりたいということで、日大の門を叩いたときに初めて大村先生にお目にかかるて、お名前はいろいろな本で存じ上げていたので、感激した覚えがあります。大学院で研究室の先生から「愛称のある3つの学会に入りなさい」と勧められたのが、日心（日本心理学会）、教心（日本教育心理学会）、そして今メインの応

日本応用心理学名誉会員
福島学院大学短期大学部教授

玉井 寛

広報委員長
東京富士大学教授

浮谷秀一

しん心（日本応用心理学会）です。その後、いろいろ指導を受けながら大学を去つて、私が最初に奉職した城西大学で第61回大会を1994年に開きました。そのとき、私も事務局長という立場で学会を盛り上げるために奮闘・努力しました。会員になってから随分経ちますが、毎年、応心では研究発表やワークショップに参加させていただき、何とか自分の立場を保っています。

■ 応用心理学会の位置づけ

藤田◎当時は日本心理学会と日本応用心理学会の会員が結構ダブっていましたね。日心で著名な方が大勢入つてらした。でも数が違つているのは、会員の質が違つているのですかね。年齢

家族のように温かくて、幸せな事務局時代でした
◎荻野



おぎの・ななえ◎1939年千葉市に生まれる。1971年早稲田大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程単位取得満期退学。1963年白梅学園短期大学心理技術科に助手として就任。講師・助教授・教授を経て、2010年3月退職、白梅学園大学名誉教授となる。1992年日本応用心理学会第59回大会委員長。1997～2003年同学会事務局長。現在同学会名誉会員。

構成とか。それは当時からあまり変わってない。

荻野○日心は基礎の領域も入っているので、いろいろな基礎心理学の人たちがたくさんいると思います。

玉井○応用心理学は、日本心理学会をはじめいろいろな単科学会へと分かれていっており、日本応用心理学会はその単科学会をつなげる役割を持っています。日本応用心理学会はそれら単科学会をまとめるといいますか、研究発表の内容も基礎よりは応用という位置づけと認識しています。現在、若い学者さんがどんどん応心に入つてこられ、とても良いことだと思います。私が応心に入った当初は、高齢の先生方について回つたのですが、今は、大学院の若い研究者が応心で積極的に発表されているのを見ると、学会の将来を考えるといい兆候と期待しています。

藤田○例えば、基礎をマスターした・しつつある人が応用心理学に入るべきであって、一から始める方がいきなり応用ではおかしいのではないか、という議論がないわけでもなかった。でも、最初から応用心理学を勉強したいという方もいらっしゃる。だから基礎をやらなければいけないという風潮があるなら、それは払拭して、若い研究者たちにとって「応用こそが心理学の王道」であるというふうにしていきたい。昔、大村先生が、「理論の前に応用があった」とい

理論の前に応用がある

○大村

うような話を私は聞いたことがありますし。

玉井○私は永年企業で働き、心理テストを生業としていたのですが、その昔テスト研究会を池田央先生を中心にうちの会社で呼びかけ、鉄道研やリクルートの人も入り、1年半ぐらい毎月勉強会をやっていました。企業や研究所にいる人々でも、先生がおっしゃった基礎的なことをやっていないわけではないのです。テスト理論でちゃんと裏付けし、研究もそれなりにきちんとやっていたと思います。

浮谷○企業で働いている先生が、研究者の集団に関わるようになってどう感じました？

玉井○会社の仕事としても大学の先生方を巻き込んだプロジェクトチームを作り、いろいろな研究に取り組みました。若い人でも毎日の現場でやろうと思った研究はできるのではないか、と私は思っています。

浮谷○研究者はどうしても内に籠もりがちですが、やはり対外的にいろいろな人と接触を持つのは、特に応用心理学研究という意味でいえば大切で、先生はそこに渴を入れていただけたのではないかと思います。

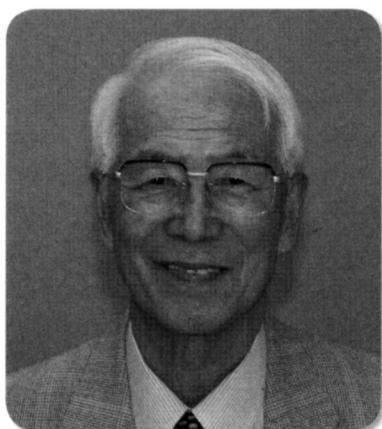
大村○さきほど藤田先生が「理論の前に応用がある」と私が言ったとおっしゃられましたが、乃木坂の「日本学術会議」で開催された心理学のシンポジウム（学習院大学永田良昭教授企画）で、私は「どういう顔だとどういう性格だとか、そういう日常的応用の幹から枝が出ていて、それが理論になってきたのだろう」と、そういう話をしました。

浮谷○心理学は、現場にいろいろあってどうすればうまくいかを考える基礎になるという意味で言うと、先生の言られた応用があってそれを心理学が基礎的にバックアップや確認したという流れがある感じがします。

大村○応用的なものから絞り出して、理論が生まれたんじゃないのかということなのです。

浮谷○だから日本応用心理学会が最初に、日心と並んで存在していたという意味や価値は、そこにあったのですね。

荻野○心理学が世の中の役に立たなくてはいけないことを考えると、また現場があつてそこに



おおむら・ますお○ 1925年東京に生まれる。1948年日本大学法文学部文学科心理学専攻卒業、大学院(旧制)に1年在籍。その後、法務府技官、東京少年鑑別所勤務。1951年日本大学に戻り、助手を振り出しに教育・研究生活に入る。1968年教授。1982年「顕現性不安の構造に関する研究」で文学博士(日本大学)。1995年定年退職、日本大学名誉教授。1995年応用心理士、同年応心名誉会員。

問題があり、そういう問題を解き明かしていくことが応用であるのですが、私みたいに基礎で固まった（笑）、それでいて応用心理学会に身を置いた人間からすると、やはり基礎は大切という思いが強い。だから、基礎心理学って簡単、さつと勉強すればすぐわかる、とは思えないのです。やはり基礎をしっかり勉強して初めて正しい理解ができる、応用に利くような知識ができるというように考えます。やはり基礎を学べば学ぶほど、基礎を知るということが難しいという思いがする。先生方のおっしゃることもわかるのですが。

浮谷◎私は心理学を始めたときに最初に、「基礎をやれ」「基礎をやれば後はどうにでもなる」って、繰り返し聞きました。だから基礎から始めた。逆説的に最近は、例えば臨床心理士を目指すのに基礎がなくてもいいようなことを聞くと、そのときの対比を私なら感じます。

藤田◎基礎の上に応用がのっかるのではなくて、基礎と応用は並行なのです。並行で発展していくという気がします。

藤田◎広い意味で応用心理学というと、今の大會あるいは機関誌に載っているような領域です。私の所属はスポーツ系ですので、過去から今までの学会機関誌や発表論文集にスポーツの研究がどのくらいあるのかを全部調べたことがあります。選手たちのメンタルサポートは、やはり応用です。応用ですが、違う学会が違うスタンスでやってらして、心理学、要するに学会に関わって、応心は関わっていない気がしました。応用の中にスポーツ心理学会があるらしいのですが。

玉井◎内田クレペリンテストはその昔、東京教育大学（※現、筑波大学）や早稲田大学の先生方と使いながらいろいろなところで研究なさってますね。その発表は確かに応心では多くはなかったのですが、研究はなされてきたと思います。

浮谷◎今年の79回の大会発表まで、ここ20年くらい、研究発表の題目のキーワードをひろったところからどういう分野の研究や題目が多いかを今年発表するのですが、それを見ると応用らしいところがありますよ。応心がいろいろなことに関わりを持っているので、この学会がい

るいろいろな意味で広く開かれて、かついろいろなことをしていると思いました。昔からその流れをずっと継いでここまでできていると思います。

荻野◎基礎と応用というのは、それほどきれいに分かれるものではないところがありますよね。例えば犯罪心理学に、筆跡の判定の問題がありますね。筆跡判定の研究は応用ですが、それ自体よく見ると非常に基礎的な研究をしていることがあるわけで、応用心理学の研究の中には基礎まで踏み込んでいる研究がたくさんあるような気がします。

浮谷◎今みたいに考えてみると、応用心理学は、心理学全体の中でいうと、全体にわたっているという印象ですかね。だから単科学会と違って、そこにいろいろな意味での良さがあって、それを活かせるのが学会、という発展の仕方をしてきたという印象があると思います。

藤田◎例えば日本心理学会の大会発表プログラム論文集の分科会の名前を見ると、応用心理学会より細かくて数が多い。さっき申し上げたスポーツもあります。スポーツも健康もあるが、応心にはそういう分科会は作っていないのか数がない。しかし、応心は幅の広い勉強ができる——看護もあるし——幅の広い構図があるので、いろいろなことができるということをアピールするべきだと思います。



たまい・ひろし◎1940年北京生まれ。慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了後、福島女子短期大学助手、株日本・精神技術研究所に勤務。その間、津田スクールビジネス専門学校と獨協大学で心理学非常勤講師。2002年に福島学院大学短期大学部教授として就任し、現在、副学長。専門分野は、社会心理学・性格心理学・心理測定で、特に「内田クレペリン検査・精研式文章完成法テスト（SCT）」に通じている。

次の世代につなげる ○浮谷

浮谷◎キーワードで見ると、看護関係の研究が多いです。ですから、心理学に関わっているいろいろな学会の中で、きっとうちが一番看護関係の人を集めていて、その研究を心理学の人たちに公表しているのじゃないかと思います。今度、看護の特集で応用心理学研究の一部を作ろうという話があります。やはり応用心理学会ならでは、というところが必要と思うので、そういうことは考えていこうと思います。

大村◎いいですよね。看護特集を作ったほうが学会の新しい面の開発に貢献すると思います。原著論文だけでなく、現場からのレポートもどんどん掲載すべきだと思います。

■若い人につなげる

浮谷◎今までざっと振り返って来たのですが、今後の日本応用心理学会はどうあるべきかというご要望があれば、そちらに新理事長がいらっしゃいますので、苦言のない届託のない……率直なご意見がありましたら、いかがでしょうか。

大村◎私が心配なのは、財政的なこと。『応用心理学のクロスロード』は年1回出さなきゃいけないし、看護学系の方も受け入れたいし。

荻野◎私が事務局長を引き受けた当初、理事会に行きますと、そこにはきら星のごとく立派な



うきや・しゅういち◎1953年市川市に生まれる。日本大学大学院文学研究科心理学専攻修士課程修了、明星大学大学院人文学研究科心理学専攻博士課程単位取得満期退学。長野女子短大専任講師を経て東京富士大学短期大学部教授。現在は、日本応用心理学会広報委員長。他に、日本パーソナリティ心理学会理事長。専門は、パーソナリティ心理学、感情心理学、学習心理学。

先生方がいらしていました。だけれど下がいない、つまり若い先生がいなかった。ですから、そのときつながなくてはいけない、と思ったのです。上の先生方と若い人との間をつなぐ、私の事務局時代はそういう時代と感じました。その後、若い世代の方たちが活躍されて、今の状況へとどんどん発展してきました。私のときは委員会を作つて、とにかく先生方を応心のほうに向かうという気持ちが強かったので、毎月1回常任理事会を開くという方針をとりました。そして次の事務局に移つてから、機関誌が増え、『クロスロード』はでき、投稿者は増えて、大会も順調に進みと着々と発展しています。ですから、今の先生が次の世代を作っていくのは大変と思うのですが、みなさんとてもよくやられていて、日本応用心理学会を盛り立ててくださっています。私が余計なことを言う余地なぞ全然ありません。

藤田◎今の学会の規模とか体制を維持するだけだったら意味がないです。これからどんなふうに、より発展させていくのかを考えるのが今期、来期以降の私たちの仕事と思っています。

浮谷◎今、会員は1100人弱なんですが、例えば、名誉会員の方と終身会員の方、簡単に言えば会費を納めてない方がいらっしゃいますので、基本的に1000人欠けたくらいの方の会費で運営しています。もう少しほしいという感じです。

藤田◎私の希望は、全てにわたって1.5倍近くです。

■応用心理士の資格をもっと活用

玉井◎確かに予算決算の繰越金がもう少しあると、やりやすいでしょうね。繰越金を少しづつ増やすためには、会員もざることながら、応用心理士ですね。応用心理士は資格、1人取得してくれると4万円の収入になります。したがつて20名の会員が取得してくれると80万。その算段で少しづつでも学会の歩みに寄与できるようにしたいものです。応用心理士の上位資格が、より価値あるものだと認知させていくことのために、学会でどんな仕掛けをしていけばいいのかと思っております。応用心理士の質の保証の

ためにも研修会等々を定期的にやりながら、これまでに認知した応用心理士をベースにした会員制度と申しますか、「応用心理士会」なるものを発足させて、資格を持っている方々が自主的に研修活動などをやっていくようなムーブメントが起きないかなと思ってます。

藤田◎前々から玉井先生からお話をあったので、応用心理士会は実現したいです。そのときは、日本応用心理学会とは別組織になりますね。

玉井◎応用心理士を持っている先生方が主体になって、応用心理士会をやられるだろうと思います。交通心理学会ではきちんと制度化されているということをお聞きしました。

藤田◎今いろいろな学会でいろいろな資格を出していますが、認定心理士と応用心理士だけが、更新制度がない。上位資格がない、それからいわゆる試験制度ではない。

荻野◎それは、応用心理士は領域が広く、認定心理士もその点は同様です。他は単独で限定されているから、更新制度を作りやすいのだと思うのです。

藤田◎最初に応用心理士を考えられた本当の目的があったと思うのですね。1つは財政的なことと、もう1つは応用心理学会をもっと活発にしようということです。玉井先生、目処とすればいつ頃でしょうね。

玉井◎今年は準備期間で来年スタートの年という考えはどうですか。

浮谷◎実質は欠けてますが、認定番号は303までです。一応、会員でなければいけないという資格です。退会されるとなくなります。それから亡くなられた方もいらっしゃいますので、実質的には300は切っています。250は超えていると思いますけど。

藤田◎会員数の1/4以上は持っているということですね。率とすれば悪くはないですね。

玉井◎決して少なくない。

浮谷◎実質的にその資格をどう活かしていくか考えていかなきゃいけないです。

■ 全てを1.5倍にする構想

浮谷◎藤田先生、最後になりますが、全体の全

てを1.5倍にするという構想をもっていらっしゃるということですが、例えば、これから先、具体的にどんな点を考えていらっしゃいますか。

藤田◎先ほど申し上げたように、日本応用心理学会独自の路線を考え直していったほうがいいと思います。それに賛同する方が、若い人たちも含めて再入会あるいは入会してもらいたいと思っています。1.5倍というのは、1つは体制の問題もありますが、もう1つは日本心理学諸学会連合という大きな組織があって、1000人前後は結構あるんですね。そこから抜け出すためには、1.5倍は必要かなということなのです。それから、若い方たちはこの学会に何を求めて入ってきているのかな、と。投稿した論文が掲載されて、それが自身の業績として就職に役立つのが一番なのでしょうけど。なるべく退会を留まってもらい、会員がもっと増えてもらえるような魅力的な学会を、残された私たちがこれから作っていかなきゃいけない。さらに、領域がたくさんありますので、その領域の社会の現場の人たちとの接点を持てるプロジェクトができるたら、それは日本応用心理学会独自のものになると思うのです。基礎の研究、研究室の研究ではなく、外に出て——昔、知能テストを学校で取ってその結果をまとめて日本の平均値を出してみようという取り組みがありましたね——同じく産業や臨床場面でも、本学会が打ち出せるものを作りアピールできるチャンスをたくさん持てば、賛同する方は増えてくると思います。

浮谷◎なるほど。そうすると、量的な意味での1.5倍って、例えば機関誌を今度年間2号から3号になるという意味ではまさしく1.5倍になります。あとは今の話をうかがうと、日本応用心理学会を社会にアピールして質的にも1.5倍を超えるものにしたいという意向で学会運営していくということですね。今までの振り返り、それで今後どうされるか施政方針を理事長からうかがいました。それに基づいて、みなさん協力して学会を盛り上げていきたいと思っています。本日はありがとうございました。

一同◎どうもありがとうございました。

社会の現場と接点を持つプロジェクトをしたい

◎**藤田**

ホープ クロスロードの 登場 星¹⁵

日本応用心理学会の未来を担う期待の若手ホープを紹介します。

臨床心理士
帝塚山大学大学院人文科学研究科研究生

安原久美子



自己紹介

現在私は、臨床心理士としてクリニックや学生相談室のインターとして働きながら、研究生として研究活動も行っています。研究では特に、カウンセリングにおける非言語コミュニケーションに興味をもっています。まず興味をもったきっかけについてお話をしたいと思います。

大学院生の頃、臨床心理士の資格を取得するための課程において、学内外でのカウンセリングの実習を受けました。カウンセリングにおいてラポールはとても重要であると言われています。しかし、いざ自分が話を聞く立場になると、目線はどこにおけばよいのか、表情はどのように作ればよいのか、どのタイミングで頷けばよいのかなど、戸惑う状況が多々ありました。教科書には、「不快感を与えないよう」と簡単に書いてあるのですが、具体的にラポールを形成するためにどうしたらよいのか？ ベテランの先生方の安心感はどのように生まれるのだろう？ と疑問に思ったことから、非言語コミュニケーションに着目した研究をしたいという思いに至りました。

非言語コミュニケーションの重要性

カウンセリング中にやりとりされる非言語コミュニケーションには、姿勢や目線、声のトーン、表情などがあります。その中でも特に私は、話を聞くカウンセラーとクライエントの表情の同調現象に注目しています。

カウンセリングの評価に関する従来研究では、カウンセラーの言語的な反応を主要素として検討されることが多く、非言語的な反応にはあまり注意を向けてこなかったと言われています。しかし、二者間の会話で非言語的メッセージが伝える情報量は93%とも言われ、中でも表情が伝える情報量は全体の55%を占めると言われ、非常に重要な要素です。カウンセリングにおいても、ことば以外のかかわりに気付いておくことの重要性が述べられています。このように、言語的なコミュニケーションとあわせて、非言語的コミュニケーションを検討することは、カウンセリングを評価するために重要であると私は考えています。

非言語的な反応の同調傾向はラポールの形成にも関係することが示されています。マイクロカウンセリングを提唱したIveyは、カウンセラーがクライエントの非言語的行動に同調的に応答することで、クライエントはカウンセラーのことを話しやすく、話をしっかり聞いてくれる相手を感じやすくなると述べています。小森・長岡（2010）は、心理臨床面接におけるカウンセラーとクライエント間の身体動作の同調傾向をビデオ解析により調査し、身体動作の相互影響過程を検討しています。カウンセラーの身体動作はクライエントの身体動作の約0.5秒後に起こる傾向があり、その傾向は高評価事例において特に顕著であることを明らかにしています。また、その傾向は50分間一貫していることや身体動作の同調が面接のプロセスを検討するための指標になると述べています。

やすはら・くみこ●奈良県生まれ。臨床心理士。2009年3月、同志社大学文学部心理学科卒業。2011年3月、帝塚山大学大学院人文科学研究科臨床社会心理学専攻を修了。現在、クリニックや大学の学生相談室で臨床心理士として実践活動を行っている。また、帝塚山大学大学院人文科学研究科研究生として、カウンセリングにおける非言語コミュニケーションについて研究を行っている。

私の研究内容

これらの先行研究をふまえ、私の博士前期課程の研究では、聞き手と話し手の笑顔度をはかり、臨床経験によって話の聞き方にどのような違いがみられるのかを検討しました。そのために、約40年間、約8年間、約2年間の心理臨床面接経験を有する臨床心理士3人と、心理臨床面接のトレーニング中である大学院生1人、心理臨床面接のトレーニングを受けていない大学生1人に聞き手役を行ってもらいました。笑顔度の計測には“スマイルスキャン”という装置を用いました。この装置では、計測したい人の顔をカメラで撮影し、その映像から対象人物の笑顔の度合いが0から100%で推定されます。その結果、臨床心理士3人と心理臨床面接のトレーニング中である大学院生のケースでは、一定の時間内で笑顔が同調する傾向がみられました。一方トレーニングを受けない大学生のケースでは全体的に、笑顔が同調する傾向は認められませんでした。このように、臨床経験年数によって話を聞く際の笑顔の同調に差が生じることが示唆されました。

今後の検討課題

このように工学的な要素を取り入れて、対話場面における表情を客観的かつ定量的に測定したことに私の研究の大きな意義があったと考えています。

す。しかし、今回の研究では、表情の中でも笑顔の同調に焦点を当てましたが、カウンセリング場面で見られるのは笑顔ばかりではありません。そのため、今後は他の表情とあわせて検討したいと考えています。

さいごに

昨年の日本応用心理学会第78回大会にて、優秀大会発表賞を受賞できることは大変ありがたく、またとても嬉しく思っております。発表した研究は、修士論文の内容でしたが、仕上げるまでに多くの方に助けて頂きました。ご協力頂いた方々に厚く御礼申し上げます。また発表の際には多くの方からご意見・ご感想を頂き、とても勉強になりました。本当にありがとうございました。自身の研究の方向性が認められたということは、今後この研究を続けていくうえで大きな自信になりました。

しかし、まだ明らかに出来ていないことがたくさんあります。今後もカウンセリングで何が起きているのか、よりよいカウンセリングとは何なのかを明らかにしていけるように取り組んでいきたいと考えております。

安原久美子（2011）聞き手と話し手の笑顔度測定における相互影響過程の移動相互関係分析 日本応用心理学会第78回大会発表論文集

小森政嗣・長岡千賀（2010）心理臨床対話におけるクライエントとカウンセラーの身体動作の関係：映解析による予備的検討 認知心理学研究, 8(1), 1-9.

優秀大会発表賞の趣旨

日本応用心理学会では、第77回大会（2010年、京都大学）より「優秀大会発表賞」を新設しました。この賞は、本学会の年次大会において優れた研究発表を行った研究者および研究発表を表彰するもので、応用心理学に関する会員の研究を奨励し、併せて応用心理学ならびに本学会の発展に寄与することを目的にしています。本学会の更なる発展、言い換えれば機関誌の充実と並んで年次大会を今以上に活性化するために生まれたものです。とかく年次大会の研究発表は、発表することのみが目的になり、その成果が検証される機会は少ないと言えます。本学会はそれを打破しようと考えました。年次大会では多数の会員が研究発表をしています。自薦他薦を問いませんが、それが本賞に結びつくことで会員同士の一体感も生まれるはずです。本賞の第1次審査は大会に参加した会員が行い、常任理事会による最終審議を経て決定されます。受賞者は次年度大会で表彰され、副賞として第1著者は懇親会招待になります。今後とも、研究発表にも更に力が入ることでしょう。

関西国際大学大学院人間行動学研究科
人間行動学部専攻
犯罪心理学コース修士2年

田山允俊

犯罪心理学との出会い

私が犯罪心理学を志したのは、大学3回生の時に進路に悩んだことがきっかけです。やりたいことがいくつもあり、どれをやるべきか、またやっていいものかを非常に悩んでいました。その当時の私というと、臨床心理士になりたいとか、警察官になりたいとか、刑務官になりたい、などの目標を次々に夢想するという非常に頭の悪い大学生でした。しかしこのまま就職したならば悔いが残る、という思いもありましたので、何とか全部ひっくるめた進路がないものか、と思い至ったところ、犯罪心理学という学問に行き着きました。

また、体育会系で体力勝負だとばかり思っていた警察官が、出世するには試験を受けねばならない、つまり試験勉強漬けの職務であると人から聞いたことも手伝って、「よし、どうせ勉強しなきゃいけないなら犯罪心理学をやろう」と一計を案じたわけです。

近世文学ゼミ出身

今は関西国際大学大学院に籍を置かせていただき学ばせてもらっていますが、大学は京都の佛教大学、しかも近世日本文学専攻でした。もちろん心理学とはまったく関係ありません。その頃はというと、ゼミで民間伝承をレポートしたり、川柳を学んだり、西鶴を読んだり、古文のくずし字とにらめっこしていました。結局、卒業研究は滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』で提出したのですが、心理学の大学院受験の面接で「卒業研究は何をしましたか」という質問に「馬琴です……」と言うしかなく冷や汗をかいた覚えがあります。しかし、このとき学んだ近世の知識が今取り組んでいる研究に役立っています。世の中何が役に立つかわかりません。



江戸時代の犯罪者プロファイリング

現在私が取り組んでいる研究の1つに江戸時代の文献を用いてプロファイリングを試みようというものがあります。日本において犯罪者プロファイリング手法が構築・運用されてから久しいですが、現在のプロファイリングの基礎データは近年の事件資料が用いられています。日本の犯罪の傾向を示す資料も、そのデータは戦後以降の事件資料であり、各事件の傾向に時代差があるのかどうか明らかではありません。歴史的な資料を用いての犯罪学研究は未だ少なく、散発的な研究が少数あるのみです。そこで、私の研究では江戸時代の奉行所の判決記録集『犯科帳』に記載された事件記録を用いて統計的な分析を行っています。

『犯科帳』は1666（寛文6）年～1867（慶応3）年まで約200年間の長崎奉行所における判決記録を収録した全145冊からなる文書です。当時の長崎は、京都・大阪・駿府・堺・奈良・宇治山田・甲府等とともに徳川幕府の直轄都市でした。その都市およびその都市周辺の天領を支配する遠国役人の奉ずる法令が江戸町奉行、寺社奉行の奉ずる法令と同じく徳川幕府の法令であることから『犯科帳』の裁判記録によって得られる犯罪情報は江戸時代の日本における標準的な刑法に準ずるものと考えられます。この裁判記録中、70年間分約100件の殺人事件に焦点を絞り、第78回の日本応用心理学会でポスター発表させていただきました。発表の際、厳しいご質問いただくこともあります。

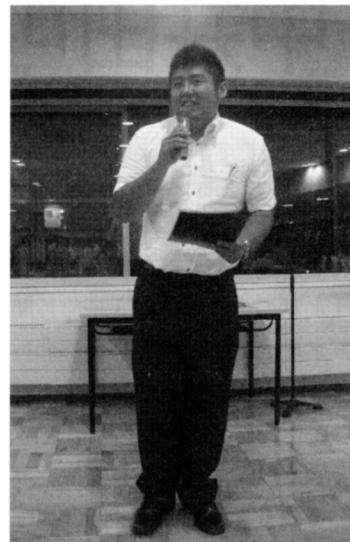
たやま・まさとし ● 1986年、熊本県出身。2010年佛教大学文学部卒業後、2011年関西国際大学大学院入学。現在、関西国際大学大学院にて江戸時代の文献研究とポリグラフ検査の研究を行っている。日本応用心理学会第78回大会にて「江戸時代の犯罪者プロファイリング」が優秀発表賞を受賞。

非常に勉強になるとともに、さらなる問題に取り組む意識を持つことができました。

この裁判記録は当時の文体で書かれているので、一例読むのに大変労力がかかります。当時の言葉も文字も現代とは異なるので、辞書を片手に地道にやるしかありません。奉行所の役人が書いたものなので、文体も「～～し候」といったいわゆるソウロウ文になっています。大会に発表するポスターを作成していた時は、侍めいた言葉使いで独り言をツツツツ言っていたのを他人に聞かれるという恥ずかしい思い出があります。完全に頭がおかしいと思われていたようでした。

辛い『犯科帳』解説ですが、ささやかな楽しみもあります。事件記録ということもあり、悲しい犯罪からちょっとおかしみのある滑稽な事件まで、当時の日本人の悲喜こもごもが垣間見えてきます。例えば、長崎という土地柄のため、貿易の「抜け荷」、つまり密輸入の犯罪事例が最も多く記載されているのですが、このやり口が巧妙です。密貿易は殺人事件と絡まないのですが、船主を海に突き落として金品を強奪する事例などもありましたので、一応全文に目を通しておかなければなりません。その他、関所を無断で抜けたり、住所不定で徘徊するなどの移動にまつわる犯罪、衣類や金品を盗む窃盗関係の犯罪などが主です。とくに女性の衣類ばかり盗んでいたという男性の事例は、江戸時代にも下着泥棒がいたのかと驚愕せざるを得ません。いつの時代も男は悲しい生き物だと思い知らされます。

また、江戸時代の殺人の動機は当座の口論や酒の勢いといった突発的なものが多かったようです。これは凶器として使用されることの多い脇差や小刀等の刃物類が容易に手に入ることと、また身につける機会が多かった社会背景が関係していると思われます。またポスター発表に用いた70年間の殺人事件のデータでは、女性が加害者である事件は4件中3件が夫婦関係・密通関係と性的関係性を伴っており、その他の1件は嬰児殺害です。女性犯罪の殺人における被害者選択の特徴は現代



授賞式にて

と共にしています。

このように、日本の犯罪傾向における共通点、もしくは相違点が時代ごとに明らかにできればおもしろいと思って研究しております。将来的には様々な各時代の資料を用いて、日本の犯罪の傾向や潮流を1本の流れとして説明できればと思っています。

今後の活動

現在は、引き続き江戸時代の文献研究、そしてそれに並行してポリグラフ検査の研究を行っております。第78回大会では、桐生正幸先生のご指導のお陰で「江戸時代の犯罪者プロファイリング」が優秀大会発表賞を賜りました。大変光栄で、賞に恥ずかしくないように今後も学問に励みたいと思っています。

また、第79回大会での懇親会で、ご歓待いただいた濱保久先生および北星学園大学の皆様に厚く御礼を申し上げます。料理が大変美味しく、また食べられるように頑張りたいと思います。

研究はいざれ論文にしようと思っておりますので、その際、皆様方からご指導・ご鞭撻賜れますよう精進いたしますので、何卒宜しくお願ひいたします。

西日本高速道路エンジニアリング関西(株)

中井由可子

はじめに

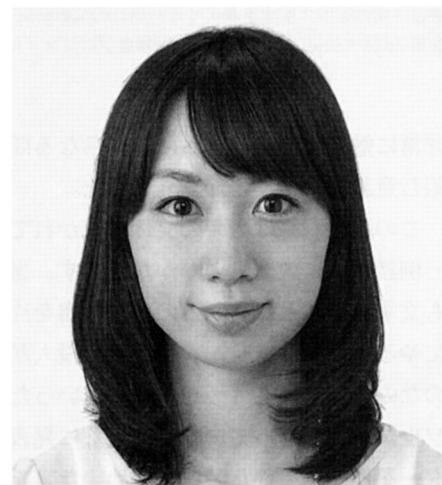
現在私は、高速道路の会社で土木技術職として働いています。私の会社には土木や施設関連の技術者が約400名働いていますが、女性の技術者は私を含めて2人、心理学出身者は私1人だけです。

「なぜ、心理学部の出身者が高速道路の会社に？」とよく驚かれますので、まずは、高速道路の土木職として働くきっかけとなった大学院での研究についてお話をしたいと思います。

研究について

現在日本は超高齢化社会を迎えておりますが、運転免許保有者の高齢化も急速に進んでおり、高齢ドライバーの起こす交通事故も社会問題化しています。私は、今後さらに増加することが予見される高齢ドライバーの方々に安全に自動車を運転していただくためのサポートをしたいと考え、大学院では高齢ドライバー（65歳以上のドライバー）の運転行動・運転意識についての研究を行っておりました。修士課程では、交通心理学をご専門とされる蓮花一己教授の指導を受け、研究テーマは「高齢ドライバーのハザード知覚」としました。

「ハザード」とは事故に結びつくかもしれない個々の対象や事象であり（蓮花、2000）、例えば、運転者が道路上で遭遇する「先行車のブレーキ」や「道路上の落下物」などは一つひとつが事故可能性を高める要因であるため、ハザードとしてみなされます。「自分が事故を起こすわけがない」と思っていても道路上には常に不測の事態が待ち受け、とっさの判断ミスが大惨事を招きますので、悲惨な事故を防ぐためには適切にハザードを知覚することが重要と考えられます。交通状況には様々なハザードが存在しますが、私の大学院で



の研究では、道路上で運転者が遭遇するハザードを「目に見える危険（顕在的ハザード）」「予測する危険（行動予測ハザード）」「目に見えない危険（潜在的ハザード）」の3つの類型に分類しています（蓮花ら、2003）。

それぞれのハザードについて詳しく説明すると、「顕在的ハザード」は先行車や道路横断中の歩行者や自転車など道路前方の進路上で目に見えている交通参加者が当てはまります。次に「行動予測ハザード」は、駐車場から後退する車、右折レンジで止まっている対向右折車など、今後の行動によっては事故可能性が高まると予測される対象が当てはまります。最後に「潜在的ハザード」は、目には見えていないが、危険を伴う交通参加者や対象物が存在している可能性を孕んでいる場所や地点であり、交差点での柵や家屋による死角、駐車車両の陰などが当てはまります。

このようにハザードを3つの類型に分け、高齢ドライバーと中年層のドライバーのハザード知覚能力を比較した結果、高齢ドライバーのハザード知覚能力は中年層のドライバーよりも低く、特に行動予測ハザードと潜在的ハザードを知覚する能力が加齢により際だつて低下しているという、蓮花ら（2003）による先行研究の結果を支持する結果が得られました。さらに、ハザード項目ごとに詳細に分析を行った結果、高齢ドライバーは潜在的ハザードの中でも見通しの悪い交差点でのカーブミラーに関するハザード知覚において弱点を有していると推測できました。

なかい・ゆかこ ● 1986年兵庫県生まれ。2009年3月、帝塚山大学心理福祉学部心理学科卒業。2011年3月、帝塚山大学大学院人文科学研究科臨床社会心理学専攻を修了。現在は、西日本高速道路エンジニアリング関西(㈱)にて高速道路事業に関連した交通計画・交通工学分野のコンサルタント業務に携わっている。

高齢者と高速道路

近年、高速道路での逆走が社会的にも問題となっています。様々な分析が行われていますが、特に高齢ドライバーの関連する逆走事故の割合が高く、増加傾向であることがわかっています。高齢ドライバーが多く関連する事故は、逆走事故だけではありません。本線合流部や料金所付近など、高速道路における交通錯綜箇所においても、高齢ドライバーが事故を起こしやすい箇所であり、しかも非高齢者とは異なる事故形態だということが事故データより明らかになっています。

高速道路においては、交通事故防止のための様々な安全対策が実施されていますが、高齢者に配慮した対策は少なく、高速道路上の高齢ドライバーの増大に対して一刻も早い事故防止対策を考えることは道路管理者にとって重要な課題です。既存の高速道路の構成要素（道路構造、各施設物等）と交通運用方法の課題・問題点を抽出し、高齢ドライバーの方々に配慮した道路環境の整備を行うといったハード面の対策はもちろん重要です。しかし、現在の高齢ドライバーの方々は高速道路の教習や走行の経験が乏しいドライバー多いため、彼らに対する高速道路の利用のため教習の実施や高速道路走行のガイドの役割となるチラシ・パンフレットの提供といったソフト面からの対策は、今後ますます重要になってくると考えられます。

応用心理学の視点を活かして

現在、私は高速道路上での渋滞や事故の原因分析をはじめ、高速道路利用者の方々の快適な走行を支援する情報提供方法の検討、繁忙期及び集中工事などの有事の交通量予測や渋滞状況の予測など、高速道路上の様々な交通現象を多角的に分析・検討を行う業務を行っています。どの業務においても自動車を操作する人間が関わる課題であり、心理学の立場からどのような支援・提案ができるのか考え、課題解決に向けた効果的なサポートができるよう、日々奮闘しています。

さいごに

冒頭にも申し上げましたが、私の現在勤める会社は女性の土木技術者が私を含めて2名だけです。性別も、関心のある分野も異なる方々の中で業務を進めていくうえで、いつも大切だと感じることは、課題や状況への柔軟な対応力と日頃のコミュニケーションです。私の出身校、帝塚山大学は先生方・院生同士の仲が良く、和やかな雰囲気に包まれており、私にとって、今でもとても温かい場所です。学生時代は、自分の研究について様々な先生方に気軽に相談でき、ご指導頂けたことで、多様な視点から物事を考えることができ、多くの刺激を受けることができました。また現在、異なる分野の方々と積極的に協力し合い業務を進めることができるのは、大学院において、勉強だけでなく、コミュニケーション（飲み会）の大切さも存分に教えて頂いたおかげだと、先生方には心から感謝しております。

まだまだ力不足ではございますが、年齢・性別・障がいの有無を超えて、様々な方々が安全・快適に利用して頂けるような高速道路の環境づくりに、また応用心理学研究の発展に貢献できるように精進したいと思っております。.

中井由可子・蓮花一己 (2010) 高齢ドライバーのハザード知覚に関する研究 関西心理学会第122回大会発表論文集

蓮花一己 (2000) 交通行動の社会心理学 北大路書房 pp.36-48.

蓮花一己・石橋富和・尾入正哲・太田博雄・恒成茂行・向井希宏 (2003) 高齢ドライバーの運転パフォーマンスとハザード知覚 応用心理学研究, 29 1-16.

子どもたちの未来を支える

藤森立男



ふじもり・たつお 横浜国立大学大学院国際社会科学研究科教授。人間科学や危機管理論などを教育・研究している。主な著書に『復興と支援の災害心理学』『産業・組織心理学——変革のパースペクティブ』(編著、福村出版)がある。日本応用心理学会常任理事、産業・組織心理学会理事。

なぜサポートをするのか

東日本大震災による原発事故によって、福島県大熊町の子どもたちは仮設住宅での避難生活を余儀なくされています。また、放射性物質の汚染除去はいつ完了するのか、いつ故郷に帰れるのかなどに関する正確な情報提供がなく、子どもたちは今後の生活について見通しが持てない状態になっています。人生を主体的に生きることができず、他者に運命を握られ、翻弄されることは無力感やむなしさを募らせ、心の安定を喪失させます。心にトラウマを受けた子どもたちは自分の殻に閉じこもりやすく、孤立感をいだきやすいのです。

この悪影響を断ち切るために、周囲の人々との協同の活動を通して温かな人間関係を築く必要があり、自分が受け入れられ、大切にされているという感覚を味わうことが大切です。こうしたことから、会津若松市に集団避難する大熊町の子どもたちを対象に心理的な支援活動を行いました。

どんな支援活動をしたのか

会津若松市の仮設住宅を訪問し、自治会長や保護者の方々と話し合い、どのようなことが求められているかを把握し、ボランティア活動として、陶芸体験、お菓子作り、絵本作り、餃子祭りなどを提案しました。これら活動を通じて、トラウマを克服し、コミュニケーション能力や社会性など

を養い、ひいては生きることに対するエンパワーメントを育てることが可能であると考えました。活動は2011年10月から11月に実施されました。以下、会津若松市河東学園の仮設住宅集会所で実施した内容を紹介します。

①絵本作りⅠ：園児を指導したのは東京学芸大学附属国際中等教育学校の渡辺有理子先生、児童を担当したのは明治大学附属明治中高等学校の江竜珠緒先生でした。テーマは園児が広告写真を使ったコラージュの絵本作りで、小学生はポップアップ絵本作りでした。園児はしゃべりながら作成している子が多く、ボランティアが子どもたちの言葉をひろいながら関わっていました。小学生の場合は比較的簡単に立体化できるので、カタツムリやリンゴの皮など、児童の好きなイメージの絵本を楽しんで作成していました(写真1)。

②絵本作りⅡ：この活動も江竜珠緒先生と渡辺有理子先生が指導しました。絵本作りⅡのテーマはしづみ絵本作りでした。子どもたちはアイデアが浮かぶと画用紙いっぱいに絵を描きはじめ、シールやテープなどの素材を使いながらカラフルでユニークなしづみ絵本を完成させていました。高学年の女子のひとりは自宅で飼っていたペットを描いていました。長期の避難生活のなかで亡くなったりと話してくれましたが、大切な家族の一員であったペットを作品に残すことで、いつまでも共に過ごした日々を思い出せるようにしたのかもしれません。

③陶芸体験：指導したのは宇都宮陶芸倶楽部を主催する伊東功太郎先生で、宇都宮のアトリエから手口クロ20台、信楽土30キロなどを会場に搬送して行いました。テーマは手びねりと絵付けでした。仮設住宅で不自由な思いをしている子どもたちでしたが、楽しんで作陶している様子でした。子どもたちは真面目に取り組んでいたし、何よりも作りたくてしょうがないという思いが伝わってきました。

④お菓子作り：会津若松市内のベーグルカフェに勤めるパティシエの酒井加津江先生が指導し、

テーマはクッキー作りでした。クッキーの型を抜くのは予想以上に上手にできており、焼きあがったクッキーにアイシングで仕上げするのも、それぞれ楽しんで作っていました。男子児童はお菓子作りに躊躇するのではないかと危惧しましたが、男女とも熱心に取り組んでいました（写真2）。

⑤陶芸作品の発表会と宇都宮餃子祭り：指導したのは鹿沼市立南摩小学校の島田美代子先生といわい産商に勤務する岩井美路子氏でした。餃子1080個、米25キロ、飲み物150缶などを準備しました。当日はすでに親しくなっていた子どもたちが、準備に取り掛かるボランティアの近くに集まり、和やかな雰囲気のなかで始まりました。作品発表会が終わると、並んでいた人たちから集会所に案内し、炊きたてご飯をよそった食品用パックを手渡し、それに焼き餃子、揚げ餃子、漬け物などを自由に盛りつけました。集会所の外では、大鍋から水餃子、温かい飲み物などを渡しました。「温かい食べ物が嬉しい」「流石は宇都宮餃子」などといった声が寄せられ、たくさんの笑顔に出会うことができました。餃子祭りの終盤には、仮設住宅の人々から柿やリンゴなどの果物の差し入れがあり、ボランティアたちへのねぎらいと感謝の交換がありました。

子どもたちの評価はどうだったのか

参加した子どもたちは餃子祭り（約120名）を除き、延べ42名（保護者は延べ17名）であり、各活動の最後に子どもたちに対してアンケート調査を実施しています。ここでは、児童が回答したアンケート結果（21名）について報告します。回答は3件法であり、「はい」と回答している結果を見ると、今回の課外活動を「楽しめた（95.2%）」「興味を持った（81.0%）」「満足した（85.7%）」となっていました。こうしたことから、8割を超える多くの子どもたちが今回の課外活動を肯定的に受けとめていました。

子どもたちが体験した絵本作りや陶芸などの活動はそのほとんどが初めての体験であり、最初の



写真1：絵本作りをする子どもとボランティア

段階では「できない、どうしよう」という反応が見られました。しかし、ボランティアたちの丁寧な指導と励ましなどによって、次第にできるようになっていくプロセスを観察することができました。子どもたちは「やればできる」という自信と周囲の大人たちから受け入れられ、配慮されているという安心感を持つことができたと考えています。また、先にできるようになった子どもが他の子どもにアドバイスし、相互に教え合う様子も観察しており、子どもたちのコミュニケーション能力や協調性などを育む機会にもなっていました。

なお、私たちの活動は森下高治先生（日本応用心理学会前理事長）を始めとする多くの方々に支えられています。皆様のご支援に心から感謝申し上げております。



写真2：お菓子作りの様子

コミュニティの力

村上 裕子

むらかみ・ゆうこ 横浜市立大学文理学部（心理専攻）卒業後、会社員生活の中で職場の心の問題を目の当たりにし、大学院に進学、心理臨床の道に進む。立教大学院文学研究科博士課程前期修了（心理学修士）。現在は東京海上日動メディカルサービス株式会社にて、EAP（従業員支援プログラム）業務に従事。社外活動として、在外邦人の支援、岩手県大槌町の支援等を行っている。

「毎朝、2人でコーヒーを飲むのが日課だったけれど、ここでは、そういうことをしては申し訳ない。ぜいたくだしなあ」と、震災直後の避難所で語られた中年の夫婦の言葉。これが一連の支援活動の契機となりました。

避難所でのカフェ開設（2011年4月29、30日）

支援チームは、相馬市保健センターはまなす館（避難者約400名）にて、「避難所に潤いを届ける」というテーマで、カフェ「いっぷく亭」を開設。生花を飾り、レギュラーコーヒーや飲料、菓子を準備しておき、個々人に好きなものを選んでもらいました。そして、待ち時間やコーヒーを飲みながら始まる自然な語りに寄り添うとともに、必要に応じて避難所を巡回する医療チームに繋ぎました。また、カフェの前のスペースで、ストレッチやタッピングタッチを用いたリラクセーションを実施しました。

幼稚～小学校高学年の子どもたちが次々に「お手伝いしたい」「（コーヒーを）入れたい」と集まってきたため、事故のないよう目配りしつつ参加してもらいました。「いつもやってたから」と、手伝いを通じ地震前の生活を取り戻したかのような子もいました。そのうち「だっこー」としがみついたり、ああしろこうしろと命令し始めたり、被災体験を語り始める子もあり、支援者はできるだけ彼らにつきあいました。

「人に入れてもらうとおいしい」「いい匂いだ

から来たんだ」「本物の花はきれいだなあ、いい匂い」等と、カフェは好評でした。また「今は笑ってても、夜は眠れなくて毛布の中で泣くんだよ」「（支援や寄付に）ありがとうっていうのも疲れたなあ」「言っても仕方ねえけど悔しいなあ」という、本音や苛立ちも語られました。

医療チームからは「コーヒー飲みに来るついでにおいで」と、じっとしている避難者を医療相談に誘導しやすい、という利点が語されました。そして、避難所スタッフが一息つく機会にもなりました。「えっ？ 私がいただいてもいいんですか」と、スタッフが驚きつつ飲み物を受け取り、「せめて今だけでも、一服してください」との声に、涙ぐみそうになる方もいました。

カフェは、避難者が仮設住宅に移る直前の6月にも開かれ、終了時には、子どもが何人もメンバーの車に貼りつき発車できない、というエピソードもありました。

仮設住宅での盆踊り大会（2011年8月20、21日）

避難所で聞いた「今年は盆踊りできないなあ」の声を受け、相馬市大野台第1応急仮設住宅（住民約350名）にて盆踊り大会を開催しました。様々な団体の協力のもと、子ども用浴衣の配布、相馬市仏教会の僧侶による追善法要、ゴスペルライブに次ぎ、住民の生歌生演奏による盆踊り大会、花火大会が催されました。「よい供養になった」「まだ踊り足りない」「一緒に踊って供養してくれてありがとう」「花火も見られてよかった」などという声が聞かれました。

翌日のカフェの場では一転して、先行きに希望が持てぬ深刻な問題や、先々の不安が語られました。狭い部屋で息を潜めるように暮らす様子が伺え、心身の緊張感と活動低下による運動不足が問題として見えてきました。リラクセーション中、体の緩みに伴い、涙を流す者もいました。「次はいつ来る？ 何やる？ きのこ山（芋煮）か？」との声に、次の活動を芋煮会と決定しました。

仮設住宅での芋煮会実施（2011年11月13日）

秋になり、同じ仮設住宅にて芋煮会の実施を企

画し、支援者と仮設内自治会の実行委員でと共同運営の話が進んでいました。ところが、自治会が子どもたちにイベントを企画した経験を経て、「自分たちが全部やるから、遊びに来るつもりで来てほしい」という申し出があり、自治会主導での実施となりました。住民が協力して動く体制が作られ、実行委員はどんどん増えて25名となり、彼らがほぼ全てを取り仕切りました。彼らが声をかけ合いながら動きと動き姿は、常に天気のことを話し、大きな自然の力に対して皆で協力しあう漁師町の日常を彷彿とさせるものでした。

大鍋2つに800杯分の豚汁が湯気を立て、「おにぎりも焼きそばもお食べよ」「豚汁、もっとお食べよ」と、どんどん声がかかりました。「ありがとうございます」「あったまるな」「おいしいなあ」が飛び交い、広場は活気にあふれていきました。「家で皆で食べるから」と人数分のお椀をお盆で運ぶ住民の姿も目立ちました。食事の後は、県内の2つの太鼓のチームが演舞を披露し、「太鼓はどーんと腹の底に響いていいなあ」「辛くとも、力が出るなあ」という言葉が聞かれました。全ての片付けが終了した後、住民の実行委員と活動メンバーが集まった際、組長の挨拶の中で、「もうこの仮設は大丈夫」との言葉があり、住民側からの希望で、支援活動の終了が決まりました。

活動の中で考えたこと

間接的非侵襲的支援　過去の震災時の支援に対する反動からか、避難所では調査の類いは一切禁止で、「カウンセラーお断り」という所もあったといいます。また、地縁血縁内輪の関係が重視され、精神障害へのスティグマが残る文化を考え、「外からの精神保健専門家の直接的支援」ではなく、避難者の言葉に寄り添う形で、「被災地に潤いを届け、ひととき和んでいただく」という間接的支援を選びました。そして、阪神淡路大震災後の神戸大学医学部病院の病棟のエピソードに習い、避難所に生花を持ち込むことにしました。花の瑞々しさは、男女共に好評でした。

子ども、大人、コミュニティ　活動を始めてみると、意外にも小さな子どもたちが次々に集まっ

てきました。そして子どもたちの動きに目を細める大人たちがいて、自然に話が始まりました。支援者が避難所社会に受け入れられていくかのような過程があり、それには子どもたちとの関わりが1つの鍵になったようです。また、芋煮会の前に自治会がイベントを企画したのも、運動会の中止で踊りを披露する場をなくした子どもたちのためでした。彼らに対する大人たちの思いが、コミュニティの機能を促進させ、イベントの成功が住民の自信につながりました。ついには、芋煮会を「支援者をもてなし皆で楽しむ会」として成功させ、「被援助集団」からの脱却に至りました。

ありがとうと言い続ける立場から、言われる立場へ

支援や慰問に、「ありがとうございます」と頭を下げ続ける避難所での生活は、震災までは自立して生活していた避難者にとって、ありがたいだけではなかったはずです。サポートの互恵性という面からは、負債感ばかりが募り、自尊心の低下する経験でもあったでしょう。仮設住宅の芋煮実行委員のメンバーにとって、食材の調達から片付けまで、全てを自分たちで仕切り、皆の「ありがとう」「おいしい」の言葉を聞き、一緒にそして対等に、ひとときを楽しむ機会を持てたことは、達成感とともに震災後の生活で募った負債感を軽くする体験になったと思われます。

もちろん、避難所の居場所や仮設住宅の部屋から出てこなかった方々もいます。しかし、コミュニティが機能するきっかけとして、活動はささやかにお役に立てたのではないかでしょうか。また、その背景として、仮設住宅になるべく同じ地域の人を集めて入居させるという、相馬市の政策があったことも忘れてはなりません。皆様には、この先の生活の糸余曲折を、個人とコミュニティの力をもって乗り切っていただくことを願うばかりです。

最後に、今回の活動を助成していただきました日本応用心理学会と、大正大学、多文化間精神医学会、福島県心のケアチーム、相双保健福祉事務所等、活動に関わった全ての方々に、心よりお礼申し上げます。

つながりをつくる支援 —京都の家プロジェクト活動報告

宮下 芙美子



みやした・ふみこ○京都大学人間・環境学研究科共生文明学専攻修士課程在籍。2011年3月、東日本大震災・福島第一原発事故の影響で京都に一時避難された方の支援活動を友人と組織。その後大学院を休学し、農地が汚染された農業生産者の移転を支援する活動にもあたっている。人と人のつながりを活かすことで、支援者・被災者の一方的な関係に閉じない、より開かれた支援のありかたを模索している。

京都の家プロジェクトとは —シェアハウスという「いれもの」からのはじまり

京都の家プロジェクトとは、2012年3月の震災・原発事故発生直後に、京都のシェアハウス（複数の個人が共同で生活する住居）の住人を中心に組織された、被災された方の一時的な避難を受け入れることを主目的とする支援活動です。

シェアハウスは、もとより複数の個人が生活をともにしているため、物理的にも心理的にも外部からの訪問者を受け入れるハードルが低く、また地元に生活拠点を置く他の住人と日々ふれあえることから、土地勘のない避難者が生活を送るためのサポートを受けやすいことが特徴です。このような発想をもとにした筆者の呼び掛けに応えて、各シェアハウスの代表が集まり、受け入れのためのグループを組織し、インターネットを通じて活動を広報しました。

シェアハウスに限定せず、「自分のもっている居住スペースを利用して避難者の一時避難を受け入れる」希望者を併せて募ったところ、一般家庭でのホームステイ、アパートの空室や持て余している空き家の提供の申し出も寄せられました。代表である筆者が、問い合わせのあった避難希望の方の条件（性別や受け入れ希望期間など）を照らし合わせて受け入れ先を紹介し、直接引き合わせを行うことで、居住条件の不一致によるトラブルを未然に防ぐことに努めました。また受け入れを

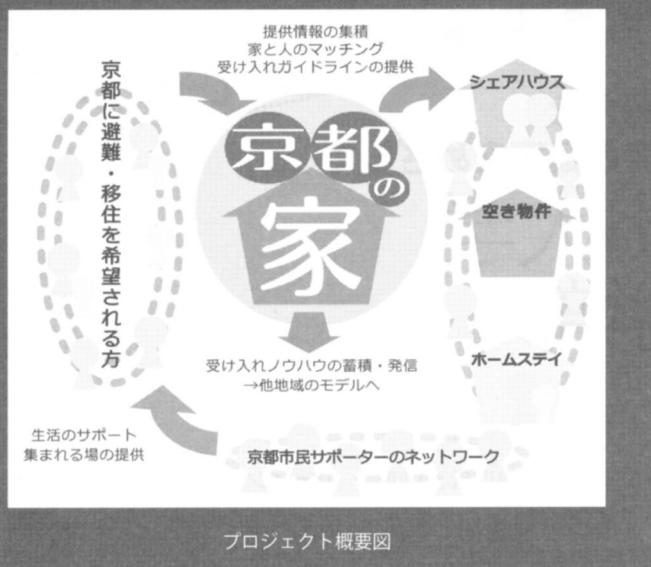
行う住居の住人同士はメーリングリストで連絡をとり合い、受け入れにあたっての注意点やルール設定の方法等の情報を共有し、受け入れがよりスムーズに進むようなフォローアップ体制を構築してゆきました。結果、2012年3月までに10数件の受け入れのマッチングを成立させることができました。また、これらの実際の受け入れの経験をもとに、避難者を住居で受け入れるためのノウハウや留意すべきことをまとめたものをウェブ上で公開し、他地域・他団体でも応用してもらえるような形をとりました。

プロジェクトのめざしたもの —求める人と支援の手をつなぐ

プロジェクトの背景には、福島第一原発事故によって身体的・精神的・社会的に影響を受けながら、原発からの距離のために避難対象とみなされず、自治体等の公的機関の支援を受けられない「自主避難者」となった方が多くいらしたという状況がありました。また、避難対象と認められたものの、先の見えない状態でまったくつながりのない新しい土地へ避難することへの抵抗が強く、踏み切れずにいた方も多数いらっしゃいました。

一方、受け入れ側の住人からも、「なにかしたいと思ってはいたけれど、どうしたらよいかわからなかった」という声が聞かれました。関西にてはどうしても被災地が遠く感じられてしまい、具体的なアクションが起こせずにいた人も多く、京都にいながら、むしろ、京都にいるからこそできる支援であるということが、本プロジェクトが多くの方に認められ、広がりを持つことができた大きな要因であったと思います。

さらには、プロジェクトがウェブ上等で注目を集めることにつれ、「住まいの提供以外にできることはありますか」といった問い合わせも相次いで寄せられるようになりました。シェアハウス住人と同じく、事情が許さず被災地に直接足を運ぶことのできない京都市民が京都でできる支援を模索する中で、避難してきた方々の生活のサポートを申し出てくれたのです。こうしたボランティアの



方々がシェアハウス住人に代わって生活案内を行ったり、京都市民と避難してきた方々との交流会を企画したりといった活動も見られました。

こうしたことから、本プロジェクトは、組織として間に立つことで、支援を求める人となにかしたい人の両者をつなぐ、ひとつの有効なかたちであったと自負しています。

プロジェクトのもたらしたもの ——広がり、続くつながり

——最初はどんな感じになるのかわからず不安もあったけど……○○さん（避難者）がうちに来てくれて、本当によかったと思います。話を聞いて、いま同じ日本で起こっていることがリアルに感じられたし、自分にできることは何かを真剣に考えられました。そして、大切な友達がひとり増えました。

これは、プロジェクトを通して受け入れを行ったシェアハウス住人のひとりの発言です。受け入れが成立したシェアハウスの多くでは、事前のマッチングが功を奏し、受け入れを行った住人側と受け入れされた避難者との間に「支援」を超えた人間関係が生まれている様子が見受けられました。避難者が一時避難を終え、被災地であるとの居住地に戻ってからも、滞在していたシェアハウス住人たちとの交流が続き、友

人としてお互いを訪ね合う親しいつきあいが継続しているところも多くあります。また、イベントスペースを併設するあるシェアハウスでは、受け入れされた避難者を話し手に迎え、震災と原発事故を経験したこれからの社会を考える茶話会が催され、シェアハウス住人のみならず、多数の参加者が直接避難者の話を聞くことのできる機会が設けられました。

支援を受ける被災者／支援をもたらす支援者という単純で一方的な関係にとどまらず、経験をわかちあう、單なる一過性の支援活動を超えた発展がみられたことは、発起人である筆者としても、驚きであるとともに大変喜ばしく、光栄なことでした。

最後に

末筆ではございますが、本活動にご支援くださいた日本応用心理学会の諸先生方、そして筆者の活動をいつも応援してくださり、今回の支援助成をご紹介くださいた田中真介先生（京都大学高等教育研究開発機構）に、いま一度心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



大学探訪

研究室におじゃましました 専門分野を超えた 心理学の教育と研究をめざして 帝塚山大学 心理学部

| 蓮花一己 (帝塚山大学心理学部教授)

少人数での心理学の総合教育

帝塚山大学心理学部は2011(平成23)年4月に開設されました。前身の心理福祉学部心理学科(2004年4月開設)と同様に、現代社会に生きる人間を総合的に教育研究し、心理学の立場から「人間と心」「人間と社会」の諸問題の理解と解決に向けてアプローチすることを目的としています。本学部では、心理学を「実験心理学領域」「社会・応用心理学領域」「臨床・発達心理学領域」「健康・スポーツ心理学領域」の4分野を中心に、講義系科目と実習系科目を両輪として体系的に学びます。また、カウンセリングスキルは国民の誰もが必須の資質であるという認識の下に、学部生全員に対して、「カウンセリング論」や「グループカウンセリング実習」等を通じて、その基礎的技法を習得させます。

心理学部の学生定員は各学年100名であり、全国の心理系学部の中でも少ない定員となっています。少人数教育により、学生一人ひとりの個性と意欲を大切にして、教員がチームで教育や研究指導を行うように心が

けています。具体的には、1回生での「基礎演習」、2回生での「心理学実験実習」など、何名かの教員が共同で実施する実習や演習が多いことが特徴です。たとえば、必修科目である「心理学実験実習」の場合、専任教員が4名、非常勤教員が4名の計8名が担当しています(平成24年度)。120名ほどの学生を3グループ18班に分けて、毎週金曜日の4限と5限を貫いて、時には7時過ぎまで実験や調査法を実習させます。

学生支援では、心理学科の初年次教育の取り組みとして、入学後の円滑な大学生活への導入と学習のスタートのために、毎年、入学直後に合宿オリエンテーションを行い、全学生、全教員参加(指導のための上級生を含む)による導入指導を行っています。そのプログラムは、人間関係づくりの要素をもつもので、学生同士がお互いの人間関係を形成し、集団生活に早期になじめるようにアドベンチャーカウンセリングの手法を取り入れています。アドベンチャーカウンセリングとはグループカウンセリングの一手法であり、冒険的な課題をチームで解決していく中で、チームビ

ルディングや信頼形成を図る手法です。このプログラムは、新入生のニーズや抱えている課題により適合するように年々改良され、より満足度の高いものとなっていました。

特筆すべきトピックとして、本年(2012年4月)に帝塚山大学大学院心理科学研究科(博士課程:前期課程定員17名、後期課程定員3名)が開設されました。初代の研究科長は日本応用心理学会・前理事長の森下高治教授です。これまでの大学院臨床社会心理学専攻(修士課程)の実績に基づき、独立した研究科として博士課程での教育研究が可能になりました。心理科学研究科は心理学専修と臨床心理学専修に分かれていますが、個々の専門分野を超えてチームで教育と研究を実践するスタイルは、大学院でも実践中です。

帝塚山大学心理学教育の枠組み

心理学部では、2010年度に、文部科学省に申請した「心理福祉分野の学士力基準構築と人材の育成」の取り組みが、「大学教育・学生支援推進事業・大学教育推進プログラム」に選定されました。本取組みでは、従来のもの



蓮花一己（れんげ・かずみ） ◎京都府に生まれる。大阪大学大学院人間科学研究科博士（人間科学）。交通心理学、産業心理学を専攻。主な著書に『交通心理学』（共著、放送大学教育振興会）、『交通行動の社会心理学』（編著、北大路書房）、『こころのケアとサポートの教育——大学と地域の協働』（共著、帝塚山大学出版）。

を参考にしつつ、帝塚山大学独自の「心理福祉分野での学士力基準」を構築し、それに基づいて学習成果を適切に評価することにしています。そして、心理福祉分野での学士力として、第一に専門知識、第二に研究実践能力、第三に応用実践能力という領域を設定したことが大きな特色です。

教育課程では、基礎・理論的講義科目群からなる、心理学・社会福祉学の「コアカリキュラム」を整備しています。この「コアカリキュラム」には、学士力基準の「専門知識」と「研究実践能力」の側面を育成する講義科目群や演習・実習科目群が含まれています。「応用実践能力」を育成するために、「対人スキル」「カウンセリングスキル」「チームビルディングスキル」に関連する専門・応用的演習・実習科目群を「地域支援カリキュラム」として設置しています。また、「プロジェクトチーム活動」により、地域での実践活動を通しての学習をカリキュラムに取り入れています。

豊富な研究機器や教材を用いた研究実践能力の育成

心理学部では、学生の研究実践能力を育成するために、様々な機器や教材を用いて、具体的な研究技法の習得をさせています。実験心理分野では、脳神経科学研究として、心と脳の仕組みを解き明かすために、クロマトグラフィー等の測定機器を用いて、神経伝達物質の含量の定

量、慢性疲労、睡眠障害およびADHDの動物モデルの作成等の研究を実施しています。また、知覚運動分野では、モノの重さの知覚と運動系の制御に関するバーチャルリアリティ空間での実験などの基礎研究がなされています。

社会・応用心理分野では、「Big Five 性格検査」等のパーソナリティ検査、恋愛尺度などの大学生や一般人への質問紙調査が実施されています。また、交通心理分野では、アイカメラやジャイロセンサ（角速度センサ）、ドライブレコーダ、ビデオカメラ等の機器を駆使して、高齢者や子供の交通行動やドライバーの運転行動を教習所等でフィールド調査する研究がなされています。

発達臨床分野では、K式発達検査などの心理検査や不安尺度などの様々な心理尺度を用いて、子どもや青年の発達段階における課題への対応等を検証しています。グループカウンセリング分野では後述の地域での連携事業の一環として研究を進めています。また、産業分野では、自治体や企業の職業人のメンタルヘルスに関連して、職業人のストレス状況やストレスコーピング研究が充実しています。地域での自殺予防の研究と実践やイルカなどの動物介在活動の実践も特色のある研究テーマと言えるでしょう。さらに、内観療法やアドベンチャーカウンセリングなど内外の施設や協力機関を用いて、各々の心理介入手法

（心理療法やカウンセリング手法）の効果を検証する研究が行われています。

地域での教育実践を行なうアプローチ

心理学部および大学院心理科学研究科では、具体的な取組みとして、児童と保護者への様々な自立支援活動（子育て支援、不登校支援など）や地域での高齢者や職業人等へのフィールド調査、犯罪被害者への支援などを積極的に推進してきました（蓮花・三木, 2009）。こうした活動の場を「教育実践のフィールド」として大学院生や学部生に提供し、実践的な教育を行うのが我々のめざしている教育スタイルです。学生の社会的スキルを向上させるためには学内の講義や実習だけでは限界がありますので、心理学部では「プロジェクトチーム活動」として活動の場を提供し、教育活動に組み込んでいます。

たとえば、学内の「こころのケアセンター」（大学院臨床心理士養成学内実習施設）では、社会的場面において課題を抱える小学校1年生から4年生までの児童に対し、「のびのびクラス」を開設して、グループ活動を通してコミュニケーションの力や社会的スキルの向上をめざし、発達を促すことを目的としています。親子で別々に分かれでグループを形成し、子どもグループは工作や感覚遊びなどをを行い、保護者グループには保護



アドベンチャーカウンセリング
実習の様子

者同士が情報交換や体験を語り合う場を提供しています。この活動にも、大学院生だけでなく、学部生もボランティアとして積極的に関わっています。

地域支援活動として、奈良県生駒市や大阪府交野市教育委員会と協定を結んで教育連携を実施しています。交野市内の小学校では、アドベンチャーカウンセリングを用いた授業を行っているだけでなく、小学校教員の研修会も大学内のアドベンチャーステーションで実施しています。これらの活動に参加することで、学生にとって、実際の授業だけでは得ることができない、学校現場で活かすアドベンチャーカウンセリングを学ぶ機会となっています。

発達・臨床心理領域だけでなく、交通心理学など他の分野でも同じ考え方で研究と教育の場を設定しています。たとえば、私の指導する交通心理学分野では、近年問題となっている高齢自転車利用者の調査を教習所の協力で実施しました。65歳以上の地元の高齢者にお越し頂いて、日常生活での自転車利用の意識と実態を尋ねる質問紙調査を行った後に、教習所のコースをお借りして、自転車で走行してもらいました。ジャ

イロセンサ（角速度センサ）とGPS、さらにビデオカメラを装着したヘルメットを使用して、自転車走行中の左右への安全確認行動や走行速度などを記録し分析しました。こうした調査でも学生と大学院生が数多く参加しており、他大学との交流も図られています。



走行調査の準備をする
調査参加者とスタッフ

心理学部の課題と展望

歴史の新しい帝塚山大学心理学部及び大学院心理科学研究科では、教育と研究の質を高めるために、地域に密着した研究教育活動を展開するのみならず、今後は関係機関との連携、学際的活動および国際的活動をさらに展開させる予定です。日本初の心理学部として長い伝統を有する愛知県の中京大学心理学部とは、2011年度より連携事業を進めています。毎年2回開催する合同研究会では、相互の大学の教員が発表者となり、発表と質疑応答を行います。応用心理の分野での合同調査などの実績も蓄積されており、今後とも連携を深める予定です。

学際的活動では、近隣に「関西文化学術研究都市」があることから、(株)国際電気通信基礎技術研究所(ATR)や奈良先端科

学技術大学院大学などの中核施設との学術交流が行われています。今後も学生と大学院生の関わりを強めるべきでしょう。また、国際交流について、他大学にはない取り組みとして、パラオ共和国での「ドルフィンパシフィック」でのイルカ介在活動の研修が継続的に実施されています。心理学部では、毎年教員が北米やヨーロッパを中心に長期研修や短期の学会参加を行っており、継続的な国際交流が図られていますが、学生や大学院生の国際交流はまだ少ないのが現状です。外国に行くだけでなく、外国からの研究者や交換留学生を受け入れるなどの体制を作り上げることがわれわれの大きな課題です。

研究活動を着実に推進することは、大学や大学院での教育水準を維持するために不可欠な要素ですが、本学でも他大学と同様に、近年の大学予算の縮小により研究費が圧縮され、研究の維持が困難になりつつあります。タコつぼ型の研究ではなく、専門分野を超えて、各教員の得意とする研究手法や統計的手法を活用しつつ、チームとして支え合う柔軟な研究体制が今まで以上に重要となるでしょう。本年度の大学院博士課程の開設に伴い、分野を超えた共同研究が立ち上がりつつあります。たとえば、臨床心理学の研究課題に対する、脳波計等の機器を用いた客観／科学的アプローチが実施されており、大学院研究科を中心さらに推進する計画です。

職場探訪

臨床看護に資する研究と活動を通して看護実践科学の新しい流れを作る 九州大学大学院医学研究院保健学部門 看護学分野臨床看護学研究室

川本利恵子・中尾久子・宮園真美・木下由美子・金岡麻希

(臨床看護学研究室)

はじめに

この度は、このような執筆の機会を賜りまして誠にありがとうございます。当研究室の川本利恵子教授が、日本応用心理学会常任理事、学会賞選考委員長、機関紙編集委員であり、第76回日本応用心理学会大会長をされておりました経緯からご紹介を頂き、今回、当研究室を紹介させて頂けることとなりました。心より感謝申し上げます。

筆者は当研究室の一員ですが、今回は俯瞰的位置から当研究室を概観しながらご紹介するという形式でご報告させて頂きます。

当研究室は、九州大学大学院医学研究院に属しています。九州大学は、学生数19,000人、教職員7,700人を擁する国立総合大学です(2004年に国立大学法人化いたしました)。九州大学は、2011年に総合大学としては100周年を迎え、人社系・理工系・医歯薬系等の広範な領域にわたる基幹総合大学として発展し続けています。

6つのキャンパスを有する総

合大学の中でも、医系キャンパス内にある大学院医学研究院保健学部門に看護学分野があります。当研究室は、その看護学分野の中で研究、教育を行っています。今回は、当研究室を次の4つのPartに分けてご紹介させて頂きます。「臨床看護学研究室の歴史」の項では、九州大学及び研究室の歴史的背景を、「看護学とは…」「臨床看護学とは…」の項で看護学、臨床看護学について、「臨床看護学研究室について」の項で、当研究室のメンバー、研究内容のご紹介とともに、病院との連携、社会貢献、及び国際交流についてご紹介いたします。最後に「これから臨床看護学研究室」の項目で、本研究室と看護研究の今後について述べたいと思います。

臨床看護学研究室 の歴史

本研究室が属する保健学部門のはじまりは、大学開学と同時に設立された看護婦養成科でした。その後、1954(昭和29)年の診療エックス線技師学校、1960(昭和35)年の衛生

検査技師学校が設置され、さらに1971(昭和46)年に、看護、検査、放射の3学科が統合され、医療短期大学部が設立されました。2002(平成14)年に医学部保健学科となり、2007(平成19)年には大学院修士課程、2009(平成21)年には博士課程を設置しました。私たちが、医学研究院保健学部門の所属になりましたのは、2007年の大学院教育開始の年度でした。

臨床看護学講座は、2002年医学部保健学科となった年に、看護学専攻の中の講座の1つとして始まり、2007年教員組織の改編によって、大学院の臨床健康支援看護学に属する研究室となりました。

看護学とは… 臨床看護学とは…

看護とは、生命の誕生から死を迎えるまでの生涯、人間の健康の保持・増進、疾病の予防、早期発見、病気の人に対しては苦痛の軽減をはかり、持てる力を十分に引き出し、1日も早く健康を回復・維持するように、生活過程と生活行動を支援し援

助することです。また、死にゆく人に対しても様々な苦痛を軽減し、その方らしい安らかな死を迎えるように援助することも看護の役割の1つです。

看護学では、疾病構造の変化、医療技術の高度化、そして少子高齢社会の中で、看護を必要とする様々なライフステージにある人々に柔軟に対応できる人間性と深い知識や看護実践能力を育むことを目的として広範囲にわたる領域の学びが求められます。そこで、看護学専攻では、生命の尊厳への理解を基盤とした看護学の専門的知識と実践能力を有する質の高い人材育成を目指しています。

そのような中での本研究室の特徴は、対象が思春期から老年期まで幅広い発達段階である点と、対象となる看護の時期が急性期・慢性期・回復期・終末期の各健康段階である点です。本研究室で教授される内容は、高齢者を対象とした老年看護学、生活習慣病をはじめとする自己管理支援を中心とした慢性期看護学、そして救急集中治療や手術に関する急性期看護学の3つの看護学が中心となっています。

看護は「実践の科学」といわれます。当研究室の教員は、それぞれ、臨床で実践される医療、

看護と直結する教育を担当し、自らも実践の evidence を支える研究を行っています。またその研究の基礎的な力を学生が育むための教育もしています。それぞれの教員は、学生の自主性と知的好奇心に基づく継続的な学びの姿勢を大事にしています。

臨床看護学研究室について

1) 研究室のメンバー

本研究室には、3人の教授（うち1名が医師）と講師1名、助教6名、そして1名の教授秘書がおります。ここではそれぞれのメンバーについてご紹介いたします。

● 横木晶子教授 医師（専門分野：循環器内科学、生理学、臨床看護学）：循環器内科医として内科系・循環生理学関連の学部、大学院講義や研究指導を行っています。当研究室では、唯一人の医師であり、大学本部の役職もこなすパワフルな先生です。主な研究テーマは、睡眠時無呼吸症候群に関する研究、植え込み型除細動器挿入中患者の生活の質（Quality of Life）、心疾患患者の温熱と血行動態に関する研究などです。

● 川本利恵子教授 看護師、保健師（専門分野：臨床看護学）：日本応用心理学会を当研究室メンバーに引き会わせて下さったご本人です。看護に関する学部および大学院教育を行うとともに、本看護学分野長として、看護学分野全教員を牽引するリーダーとして、多方面でご活躍されています。修士、博士

課程の設置をはじめ、教育、研究における現在の看護学分野の形を作られてきたプレインです。研究テーマは幅広く、情報社会、コミュニケーション能力とナーシングワーク、香りの嗜好と看護療法、胃切除術が骨代謝に及ぼす影響などを行っています。

● 中尾久子教授 看護師（専門分野：臨床看護学、医療倫理、看護倫理）、大学院委員長、教務委員長、施設委員長などを歴任してきた頼もしい存在です。日本応用心理学会員で、2010年のICPA国際応用心理学会（メルボルン）にシンポジストとして参加しました。研究室長としては、女性の多い研究室なのでメンバーがワークライフバランスを保ちながら質の高い教育研究活動ができるような配慮を心がけています。主な研究テーマは、チーム医療と倫理的問題（がん医療、症例コンサルテーション）、慢性のストレスと行動の関連性、高齢者の医療・看護とQOLなどです。

● 宮園真美講師（筆者） 看護師（専門分野：臨床看護学）：学部および大学院教育を担当するとともに、研究室のメンバーが気持よく働けるように心掛けています。主な研究テーマは、QOLとソーシャルサポート、温熱効果、サウナ浴による生理・心理反応、埋め込み型除細動器を装着した患者のQOLです。

● 木下由美子助教 看護師（専門分野：臨床看護学）：患者さんの声を研究に活かしています。主な研究テーマは、直腸がん患



講義風景

者のQOL、がん患者のQOL向上を目指した介入研究です。

●金岡麻希助教 看護師、保健師（専門分野：クリティカルケア看護学）：大学病院救命ICUで看護師としての臨床経験を積み教員になりました。急性期看護のエキスパートです。主な研究テーマは生体肝移植レシピエントとドナーの周術期の相互作用です。

●富岡明子助教 看護師、保健師（専門分野：臨床看護学）：研究室メンバーの話を丁寧に聞いてくれるありがたい存在です。主な研究テーマは、心肺蘇生の立ち会いが患者の家族に与える影響です。

●梶原弘平助教 看護師、保健師（専門分野：老年看護学）：研究室内で唯一の男性メンバーで、頑張っています。主な研究テーマは、認知症高齢者の看護、在宅介護者への支援、脳神経疾患患者の退院支援です。

●潮みゆき助教 看護師（専門分野：臨床看護学）：細やかな心遣いで行き届いた仕事をしてくれます。主な研究テーマは、心停止後および脳死後の臓器提供者への看護実践に対する不全感とその影響要因の検討で、急性期の看護に関する研究に取り組んでいます。

●孫田千恵助教 看護師（専門分野：臨床看護学）：研究室のメンバーの仕事を力強く支えてくれます。主な研究テーマは、集中治療室患者の睡眠、フットケア、在宅高齢者の介護予防です。

●中越久美子 教授秘書：海外

との交渉事から様々な事務処理までこなす優秀な戦力。皆を優しくサポートしてくれます。

2) 病院との連携・協働、社会貢献

臨床看護学研究室が所属する看護学分野は、平成21年度文部科学省大学改革推進事業「看護職キャリアシステム構築プラン」看護実践力プロッサム開花プロジェクトにおいて、九州大学病院看護部と連携して活動をしています。このプロジェクトでは、本看護学分野と病院看護部が連携し、教育プログラムや教育体制を開発・整備することで、看護学生の看護実践能力の質を保証し、看護職員の看護実践能力の質の持続的な向上を図り、将来に向けたキャリアパスを構築することを目的としています。

実学を学ぶ看護教育の現場では、このような教育プログラム開発、教育指導者養成、人事交流などを、双方向で実施することは大変意義深く、有効な方法であると言えます。臨床と大学互いの、良い看護者を育成したいという思いは共通であり、順調に研究、教育の両面で協働出来ています。病院地区外でも、臨床看護学研究室メンバーは、看護協会の活動や学外講義など、社会的貢献にも努めています。

3) 国際交流

臨床看護学研究室が所属する看護学分野は、ニューヨーク市立大学(CUNY: City University of New York) や、台湾高雄医学大学(Kaohsiung Medical University) と国際交

流協定を結んで、共同研究や研究者の派遣、教育、グローバル化の育成などを目的として活動をしています。国際交流で得ることは多く、教員の英語力、教育・研究実践能力を磨く良い機会になります。将来チーム医療の現場でリーダーシップを發揮できる人材、あるいは専門教育職・研究者・行政職へと発展可能な人材を育成することを求められる本学において、国内はもとより国際的な視野で教育、研究に臨む必要があると思います。

これからの 臨床看護学研究室

看護領域の研究課題は、多岐に渡ります。看護学が全ての人を対象としており、それぞれの概念や理論をはじめ、看護の効果、現象、環境、生活など全て研究の課題となりうるからです。また、看護学は多くの基礎学問の上に成り立っているため、看護学を深めるためには多くの学問領域の知をエビデンスとして獲得していく必要があります。そのうえ、現在の看護は脳科学、遺伝子、ITといった現在の最先端の治療との関連においても研究される必要があります。

臨床看護学研究室に求められる研究は、このような状況の中で、看護実践に役立つ新しい知を創造し体系化することだと考えます。当研究室の課題は、今後もより一層、臨床の実践の知と科学（認識）の知の相互作用を理解した上で、臨床と連携しながら積極的に結果を生み出し続けていくことだと考えます。

CROSSROAD

私と応用心理学 ESSAY

大坊郁夫

5

私と応用心理学～心理学研究のwell-beingを目指す～

摇籃としての日本応用心理学会

私が本学会に入会したのは、1988年、そして大会で初めて発表をしたのは、1990年の第57回大会でした。当時、某企業の研究所からの委託研究として、眼鏡の形態と顔形態特徴とのマッチングを研究しており、その成果の一端を発表したのです。当時所属していた北星学園大学で翌1991年に本学会第58回大会（大会委員長は永田勝彦教授〔現名誉教授〕）を開催することになっていたこともあり、その準備も兼ねて大会に参加したのです。

当時、私は対人コミュニケーションをパーソナリティ、対人関係、適応の点から主に実験的に研究していました。いわば、対人関係の実験的、基礎的研究です。それまで、「応心」は、その名前にあるように、何か世間にすぐ役に立つような実践的なテーマを扱った、応用的な成果を得る研究でなければならないものと考えていました。その頃、顔の形態、魅力についての研究をしていてそこに加えて、装身具である眼鏡の枠の形態、材質が眼鏡使用者の顔の特徴とどのような関連があるのかを検討したのです。当時の研究発表の多くは、交通、看護、福祉、人事・測定、検査などにかかわるテーマのものであり、実験室で条件を作り限定された効果を検討するというようなトーンの研究は少なかったと思います。

同時に、基礎研究では、仮説検証型のアプローチが多いのですが、応心大会ではデータの蓄積をふまえた探索的、事実発見的な研究が多かったようです。同一セッション内では広い意味では相応に関連してはいるものの、領域、分野を限定した学会に比べると同じトピック、テーマの発表は

少ないように感じました（現在でもその傾向はあるようです）。

それゆえ、普段想定していない観点からの指摘を受けることが多々あり、研究発想の基本的な土台の見直し、研究精緻化の方向性について有益な機会であったと思われます。この意味では、「応心」は、萌芽的な研究にとって大事な舞台であると思思います。この良さはその後も大きくは変わらないものの、応用心理学のいくつかのトピックについては、まとまりを呈し、研究の精緻化を伴いつつ、新たな学会を産み出すきっかけをとったとも言えましょう（産業・組織心理学会、日本交通心理学会、日本パーソナリティ心理学会など）。その意味では、歴史を振り返るならば、応心は多様な心理学系学会・研究会の摇籃の役割を持っているのではないでしょうか。

研究は連鎖し、循環する

ところで、本学会の大会発表や機関誌論文にて扱われる研究トピックに、他の学会との排他性はあるでしょうか？ その答えは「否」です。基礎研究なくして応用研究はない。

応用研究から基礎研究を見直し、新たな展開となるものであり、研究は連鎖・循環しています。かつ、研究は研究者個人のみにて完結することではなく、当該の研究の契機になった先人、そして互いに研究を刺激し合う「研究仲間」、後に続く次世代の継承者たちがいるものです。このような時間軸にあってわれわれが研究していることを認識し直すことは、独りよがりではない、社会に活きる研究を促すことにつながります。

研究の大元の発想は、日々の生活の中で素朴に抱く疑問から生まれたり、あるいは、多数者の関心、社会的な要請によるものが多い。しかし、研究の展開が相応に成熟してくるならば、先の行研究の成果に基づく、仮説検証型の研究は自ずと多くなるものです。

研究の切り口はどこにでもあるもので



す。ここで基礎と応用の連続性を考えるために、筆者がこれまで関わってきた対人コミュニケーション研究の例を挙げてみたい。心理臨床の場面で、なんらかの問題を抱えた人が医療機関を訪れる。そこで、来談者は、自分の悩みを訴える。医療者は問題点を発見する努力をし、自分の経験、関連情報を参照して、仮説を立て、相応の治療を試み、その結果を吟味し、仮説や治療法を逐次修正しながら解決に向かう。ここで、われわれは、役割としての治療者と来談者との関係、コミュニケーションに注目しがちです。治療者としての役割モデルを用意し、適切な行動をとるようスーパーバイザーからは指導されるでしょう。役割ゆえの行動として一般化されて捉えがちです。それは至極当然のことです。しかし、役割を踏まえた相互作用事態で、同じ（ような）コミュニケーション行動をとったとしても、同じ（ような）効果を生じるとは限らない。社会的な行動には多くの要因が作用するのであり、その点からのアプローチは欠かせない。どのような研究であっても、日常行動に働く多数の要因を正確に変数化し難いものです。だからこそ、ここで、基礎的・実験的研究が登場します。パーソナリティ、当該の既知の程度（あるいは親密度）などに着目した条件操作によるコミュニケーション研究です。

このような研究を展開することによって、時に当事者の役割を凌駕するような影響を引き起こす要因の働きを確認することもあるでしょう。現場実践的な研究の前提としての基礎研究が触発されたことになるのです。そして、臨床的な活動の効果を向上するために有益な工夫も可能でしょう。このように研究は循環していきます。応用研究と基礎研究は互いを前提として展開されることでこそ得ることが多いと言えるのです。

社会に貢献できる研究

10月8日、スウェーデンのカロリンス

カ医科大学は、ノーベル医学生理学賞を京都大学の山中伸弥教授に授与することを公表しました。この領域での日本人の受賞は25年ぶりの快挙です。研究は気の遠くなるような地道な積み重ねで行われるものであり、先人が一枚一枚未知のヴェールを剥がしてきた先に現在の研究がある。したがって、現在行われている研究は何枚ものヴェールを剥がしたからこそ成立しているので、先人のお陰であり、側にいる同僚とのチーム研究であることを記者会見で強調されました。身近であるかどうかを問わず、「研究仲間」がいることは誰の研究にとっても刺激を与え、工夫を促したからこそ「今」に至っているのです。われわれが行っている研究は、先行研究という時間軸、そして同時に展開している関連する諸研究をふまえた「チーム研究」になっていると言い得るのではないでしょうか。学会に集う研究者が相互に切磋琢磨し、後世につながる研究を産み出しているのです。研究成果の一端を言い放つだけで、適切な批評・応酬がないならば、学会というにはおこがましい。心理学領域では、個々人の研究成果の蓄積だけでは、今あるいは今後の社会に必要な、応用できる知見を主張したいのではないかと思っています。心理学研究のこれまでの歴史や現状からするならば、個人知を昇華した集団知をどこかで本腰を入れて磨かなければ、目先のことではない、社会に役に立つ、効果のある応用研究を示せないのでしょうか。応用心理学の現状をふまえ、数段階先の未来を見通して、学会としての集団知を高めたいものです。そのためには、前4号の巻頭言で述べましたように、1)「同種のテーマでありながら、背景や研究の仕方の異なるいくつかの研究を括って」、時間の余裕のある議論の機会を設ける、2)「多様な研究の方法を学び直す（学ぶ）機会」を設けることなどは、本学会だからできる集団知を築く1つの機会になるのではと考えています。

だいほう・いくお◎
札幌医科大学、山形大学、北星学園大学、大阪大学を経て2012年4月から東京未来大学学長・教授、大阪大学名誉教授。日本応用心理学会常任理事。対人コミュニケーションのメカニズム追究、およびwell-being実現の一助としての社会的スキル・トレーニングの研究を行っている。主な編著書:「しぐさのコミュニケーション」(単著、サイエンス社)、「魅力的心理学」(単著、ポーラ文化研究所)、「化粧行動の社会心理学」(編著、北大路書房)、「社会的スキル向上のための対人コミュニケーション」(編著、ナカニシヤ出版)、「幸福を目指す対人社会心理学」(編著、ナカニシヤ出版)等。

BOOK REVIEW

本を出しました

『新編 血液型と性格』

大村政男=著



2012年9月
福村出版
本体価格1800円

この本は、大多数の日本人が関心はあるが、その実態をよく知らない血液型と性格の問題に新しい資料を提供したものである。その資料とは、大阪の薬品問屋石津作商店の社長石津作次郎が私財を投じて設立した大阪血液型研究所の機関誌『血液型研究』全50部の内容解説である。石津は商人であるとともに学問好きの勉強家で、血液型性格問題についての賛否を度外視して雑誌を編集しているところは實に興味深い。

本書の目次は次のとおりである。
序章 体液と個性の心理学、第1章

血液型時代の開幕、第2章 古川竹二の血液型気質相関説、第3章 血液型と富国強兵政策、第4章 血液型個性研究をめぐる人びと、第5章『血液型研究』を通して見た血液型個性研究、第6章 能見正比古と「血液型人間学」、第7章 血液型人間学とテレビ放映、第8章 血液型性格学アラカルト。第5章は全体の35%を占める部分であるが、推計学的検定は故意に避けている。試みてほしい。

大村政男○日本大学名誉教授。専門は人格心理学。

『手の治癒力』

山口 創=著



2012年5月発行
草思社
本体価格1200円

私たちは誰でも多かれ少なかれ、病気にまでは至らなくても、ストレスによる抑うつや不安、あるいは身体の痛みといった心身の不調を伴いながら日々生活しているだろう。また私たちの人間関係も、IT機器の普及や地域社会の絆が崩壊して、脆く薄っぺらなものになった。育児は便利なグッズやテレビゲームのお蔭で（？）、親は子どもに触ることは格段に少なくなった。家族の絆も弱まった。孤独に生きる老人も増えている。医療の現場では、患者は人格をもった個人として扱われることはほとんどなくなってしまった。久しい。

そのような問題を抱えて苦悩しながら生きている私たちにとって、古の時代からある手技、すなわち手を当てて癒す「手当て」は苦悩や不調を和らげてくれる力強い礎となろう。手当ては親子の絆を取り戻し、患者の不安や悲しみを癒してくれる。触れるケアは認知症患者の症状も和らげ孤独の淵から救い出してくれる。人に優しく触ることは、相手の存在まるごとを、愛情をもって受け入れ支える行為であるのだから。

山口 創○桜美林大学准教授。専門は健康心理学、発達心理学。



『復興と支援の災害心理学—大震災から「なに」を学ぶか』

藤森立男・矢守克也=編著



2012年7月
福村出版
本体2400円

東日本大震災の直後、被災地では寝袋とリュックを背負ったボランティアたちの姿を見かけた。あれから、2回目の冬を迎える。原発事故に襲われ、仮設住宅に避難する被災者には帰郷の見通しが立たず、今後の人生を決められない焦りと疲労の色が濃くなっている。筆者が出会った被災者の多くは料理に水道水を使用しなくなり、ミネラルウォーターに変えている。目に見えない放射性物質に対する不安が広がっている。また、コミュニティや人間関係から分断され孤立感を深めているた

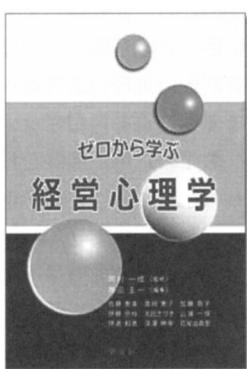
め、アルコールやギャンブル依存に陥る被災者が増えている。

英語の crisis はギリシャ語のカイロスに由来し、分岐点や転換点などを意味する言葉であった。東日本大震災と原発事故に対する日本人の対応も別れ道となっており、今後の日本の運命を左右するものとなるだろう。大震災直後の人々の熱い想いと忘却のはざまで、本書は復興と支援のあり方について考察している。

藤森立男○横浜国立大学大学院教授。
専門は社会心理学、災害心理学。

『ゼロから学ぶ経営心理学』

岡村一成=監修、藤田主一=編集



2012年1月発行
学文社
本体価格1900円

経営心理学は、産業界で働く人々の行動や経営活動について心理学の考え方を応用して問題解決を図っていくとする学問である。心理学の知識が産業界に応用されたのは比較的古く、1900年代初頭のことであった。当初は、経営者が労働者ができるだけ能率よく働かせ多くの利潤をあげることや、広告・販売活動の効果をあげる方法などについて、心理学の考え方を取り入れた研究をさかんに行っていた。

しかし、近年は心理学の重要性がさらに認識されるようになり、心理学の法則は組織の円滑化、働く人々

の能力開発や適応、安全管理、営業、販売、商品開発、消費者心理を読み解くことなど、さまざまな領域へ実践的な知見が提供されている。このように産業界において心理学のニーズが高いのに、一般読者や初学者向けの入門書が少ない状況にある。

本書は、これから経営学部や心理学部などで経営心理学を学ぼうとする学生や一般読者を対象にした「ゼロから学べる入門書」である。ぜひお薦めしたい一冊である。

藤田主一○日本体育大学教授。専門は教育心理学、教育臨床心理学。

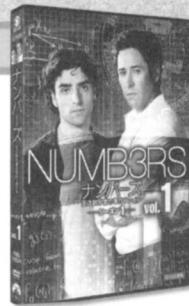


心理学から見たおすすめDVD紹介

『NUMB3RS 天才数学者の事件ファイル』

◎2009年～、DVD BOX：全シリーズ（シーズン1～6）、シーズン1（4枚組）定価 10,290円
◎シーズン1：544分、販売元：パラマウントジャパン

2009 CBS Studios Inc. All Rights Reserved. CBS and related marks are trademarks of CBS Broadcasting Inc. All Rights Reserved. TM, ® & © by Paramount Pictures. All Rights Reserved.



数字がすべて—数学で事件解決を支援する

このDVD「ナンバーズ」は、ロサンゼルスを舞台に、兄のFBI捜査官ドン・エプスと弟の大学教授チャーリー・エプスが難事件に挑むTVドラマシリーズです。アメリカでは、2005年1月から放映され2010年3月まで高い視聴率を続けていたようですが、日本ではありません。最近のFBIドラマと言えば、科学捜査なら「CSI」、犯罪者プロファイリングなら「CRIMINAL MIND」と思われる方も多いと思います。それらドラマは確かにおもしろいのですが、犯人の行動や心理状態の推定場面となると、「ええっ、それホント？」と（心理学者にとっては）ツッコミどころ満載のドラマでもあります。

それに対し「ナンバーズ」では、数学や統計学を犯罪捜査や行動分析に応用していくのですが、時として心理学でもおなじみの用語（囚人のジレンマ、リスク評価など）が数学の視点から説明され、事件解決の糸口を見出すキーワードとなっています。例えば、シリーズ第1話「PILOT（邦題：数字がすべて）」では、チャーリーがアルゴリズムを思いつき、連続レイプ事件の各犯行現場から、犯人の“基点”を突き止めます。すなわち、地図に落とし込んだ犯行箇所から確率順に等高線状で犯人の生活拠点を表示、合理的な犯罪捜査を促すわけです。この手法は、現在、犯罪捜査現場にて使用されている「地理的プロファイリング」と呼ばれるものなのですが、実は、この第1話は本物の捜査——地理的プロファイリング・ソフト「ライジェル」を作成したテキサス大学キム・ロスモ教授が関わった連続レイプ事件——がほぼ忠実に描かれているところがミソとなっています。実際の科学捜査を十分調査した構成により、エンターティーメントとしての面白さと共に、使用される理論の説明力の高さが他のTVシリーズの一歩先を行く所以ともいえます。

応用とは何かを考えさせる

シーズン2の第7話「CONVERGENCE（邦題：データマイニング）」も、われわれ研究者にとって示唆に富む内容となっています。現在、犯罪捜査の場面においてデータマイニングの手法が多く使われています。例えば、連続事件のリンク分析や顔見知りでない犯人の人物像推定での使用です。そもそも、大量データを投入しガラガラポンとしてみたら相関が出た、といったイメージから、仮説構築の手法へと変わってきたデータマイニング手法は、犯罪という偏りのあるデータを扱うのには好都合なのかもしれません。ドラマの中でチャーリーは、連続強盗事件を分析するため、過去6ヶ月の間、近辺にて発生した全ての事件の資料を用いてデータマイニングを行い、犯人検挙の有力な手掛かりを見出します。

さて、この第7話での見どころに、学生時代からのライバルがチャーリーの数学上の大きな発見に欠陥を見つけ、彼を大いに落ち込ませさせるシーンがあります。チャーリーは、温厚でユーモア溢れる父親アランに、兄の捜査の手伝いばかりで研究を怠っていること、数学界のためになる研究をしたいこと、を吐露します。データマイニングで犯罪捜査に寄与する学問の応用は世の中に役立ちます。でも、自然界の真理の追究を求めるのが研究者の性であり、その到達点を目指さない応用研究は消耗品と化します。数学の応用に興味を持つチャーリーの葛藤は、われわれが感じる「応用心理学」での葛藤に通ずるものがあるかもしれません。

数学と犯罪捜査を縦軸に、エプス家の家族愛やそれぞの恋愛、捜査官や教員の仕事と人間味が横軸として織り込まれ、理屈溢れる物語を理屈抜きで楽しめるのが、この「ナンバーズ」です。ぜひ、ご覧いただければと思います。

桐生正幸 きりう・まさゆき●関西国際大学教授。博士（学術）。専門は犯罪心理学。文教大学で心理学を学び、山形県警察本部科学捜査研究所にて21年間、ポリグラフ検査や犯罪者プロファイリングの科学捜査に携わる。現在は、地域防犯（兵庫）や性犯罪加害者対策（大阪）など行政業務にも関わりながら教鞭を取っている。

F・E・フィードラーの履歴、業績および思い出 (その3)

●
白樺三四郎

(大阪経済大学人間科学部客員教授／大阪大学名誉教授)

8. 研究室

筆者がはじめてフィードラーに接したのは1966年、三隅二不二教授の招請によって彼が福岡を訪ねたときであった。このときフィードラーは九大教育学部において自己のリーダーシップ効果性の条件即応モデルについて講演している。その後筆者は前回述べた Sample & Wilson (1965) データ再分析結果を私信でフィードラーに送り、これが Fiedler (1971, 1972) などに引用、紹介されてきた。

1975～1976年筆者は当時勤務していた西南学院大学から派遣されてテキサス州ウェイコーのペイラー大学に交換教授として勤務することになった。テキサスへ向かう途次、筆者は家族とともにシアトルにフィードラーを訪ねた。ワシントン大学（シアトル）心理学部組織研究室で歓談し、また自宅で歓待を受けた。フィードラーの自宅の庭先からピュージエット湾を行き来する大小の船を見るかに眺めることができた。

1978年春、フィードラー夫妻が日本を訪問した。このときフィードラーは福岡、京都、東京などで講演を行った。このときの講演の主題は「リーダーシップ効果性の条件即応モデル」であって、講演の後半で、リーダーの知能、経験の問題がふれられた。

1978年8月～1979年7月、筆者は西南学院大学から在外研究休暇を得て、1978年8月～12月はカリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA)

心理学部でまた、1979年1月～7月はワシントン大学心理学部組織研究室（フィードラー教授主宰）でそれぞれ客員研究員として過ごした。

ワシントン大学のキャンパスには多くの巨木が立ち並び、桜の木も多く、春には満開となって美しい。キャンパスのほぼ中央には噴水があって、はるか遠くにレイニエ山を望むことができる。芝生の上にはリスが走りまわり、毎日何万人もの教職員、学生が往来するとは思われないほどの自然環境に恵まれている。高いビルからは遠くカスケード山脈の雪をいただく山並みを望むことができる。またキャンパスはワシントン湖に面している。心理学部はガスリー・ホールと呼ばれる大きなビルにあって、多数のスタッフ研究室、実験室、実験準備室、学部長室、事務室、会議室などが入っている。組織研究室はガスリー・ホールからやや離れて建つジョンソン・アネックス A という木造平屋建の半分を占めていた。ここにはフィードラー教授研究室、秘書室、会議室（兼講義室）、大学院生研究室などがあった。

フィードラーは筆者を院生に紹介した後、1つの研究室内のある場所に連れてゆき、このデスクを数か月使用するように指示した。この部屋には2人のアメリカ人院生がすでにいた。彼ら（2人とも男性）はウエストポイント（アメリカ陸軍士官学校）の教官であり、学校から派遣されて修士課程における研究のために学していたのである。他の研究室も含めて当時の院生は10名内外であったと思われる。フィードラーはこの研究室

に 1969 ~ 1985 年在籍した。この間多くの研究者といっしょにリーダーシップ研究を続けてきたのである。

フィードラーはリーダーシップ、組織心理学、社会心理学を各学期ごとに 1 科目担当し、あとはもっぱら研究に力を注いでいた。毎週月曜日から木曜日までジュディース夫人の運転する車で午前 9 時 30 分前後に研究室に到着。いつも愛犬「ジー」を連れてきた。ジーは一日の大半の時間をフィードラーの研究室で過ごした。

当時組織研究室では①リーダーシップ訓練、②ソーダ灰（ガラスの原材料）鉱山における安全と生産性、③リーダーの知能と経験、④ワシントン州警察官のハイウェー・パトロールの新しい訓練システム、などの研究が同時並行的に行われていた。大学院入学者はもともとフィードラー理論に深い関心をもっている人ばかりで、大学院修士課程入学と同時にいざれかの研究チームに組み込まれて、フィードラーの指導のもと、先輩院生とともに研究計画の検討から実験ならびに調査の実施、データ解析、報告書執筆まで作業に参加する慣習が出来上がっていた。筆者は学部上級生（翌年度大学院修士課程入学予定）といっしょに上記④のデータ処理を担当する一方、自分自身の研究上の関心である「LPC と行動との関係」分析に取り組むことを続けた。

9. 身近に接して

筆者が使用したデスク周辺の書架には多数のデータ・ファイルがずらりと並んでいた。それは長年にわたるフィードラーと彼の共同研究者がイリノイ大学およびワシントン大学で実施してきた調査および実験によって得られたデータの貴重なファイルであった。それがすべて原資料に近い形でノートに記載され、整理されていたのである。フィードラーによればこのような形で保存されたデータは何十年後も分析を繰り返すことができるという。そのファイルは高等学校バスケットボール研究、ROTC 研究など、研究ごとに別々

のファイルに整理されていた。ある日それをめくって眺めているうちに、ある特定のページに多数の数字が書き込まれ、計算した跡を読み取ることが出来た。これこそ「リーダーシップ効果性の条件即応モデル」誕生の瞬間だったのだと、感動してこれを眺めた。これとは別にイリノイ大学およびワシントン大学における研究の成果としての各種研究報告書、論文抜き刷りなどが多数収められた書類棚があり、そこから取り出して自由に読むことができた。

そのうち、Fiedler & Barron (1967) のデータを再分析することを試みることになった。これは Meuwese & Fiedler (1964) が ROTC の学生を実験協力者として実施した実験データを再分析したものであり、このとき筆者が新しい視点に立ってこのデータをさらに分析したものである。その結果はフィードラーおよび研究室の院生にも大きな関心をよび、Shirakashi (1980) に含まれるが、あまりにも煩雑になるので、ここで述べることは差し控えたい。

フィードラーは大学院「リーダーシップ」ゼミの授業中、「自分が 1964 年に提唱した条件即応モデルがこれほど多くの人々の関心を引きつけ、これほど長く生き延びるとは當時まったく思いもつかなかった。確かにこのモデルに欠陥はある。しかし多くの批判のうち半分はきちんと反論できていると思う。批判する人は批判するばかりでなく、もっと自分の理論モデルを提唱してもらいたい」と述べたことはいまでも筆者の記憶に残っている。1979 年 7 月はじめ日本から家族がシアトルに到着した。フィードラー夫妻はある日われわれをシアトル湾内に浮かぶ「ティリカム・ヴィレッジ」観光ツアーに招待してくれた。ダウンタウンに近い埠頭を出る観光船に乗って、湾内を周遊した後、島に上陸し、ロングハウスと呼ばれる建物の中でインディアン風調理によるサケ（鮭）を焼いた料理をメインとした食事をとり、インディアン風ダンスと歌のショーを見物するというコースであった。真夏とはいえ、船上をわたる風は冷たく、体

は冷えてしまった。このため、船が島に到着したとき、スタッフが差し出した小さな紙コップに入った貝入りスープは観光客から大いに喜ばれた。この帰りの船上で筆者はフィードラー夫妻に日本製の双眼鏡をお土産としてプレゼントした。

1994年夏の国際応用心理学会大会はスペインのマドリードで開催された。この大会でフィードラーは組織心理学部会長として講演を行った。演題は認知的資源理論であった。この講演原稿(Fiedler, 1995)は国際応用心理学会機関誌に掲載されたが、この年度に掲載された論文中優秀とされた2編のうちの1編に選ばれている。この講演後の質疑応答でしだいに質問がこまかい点にまで及んでくると、フィードラーは「もっと答えやすい質問をお願いします」と言って、会場の笑いをさそっていた。

1998年夏の国際応用心理学会大会はサンフランシスコのヒルトン・アンド・タワーズで開催された。この大会でフィードラーは組織心理学部会企画委員をつとめ、同部門の招待シンポジウム企画者に筆者を推薦してくれた。これにより「東アジアの国々における組織心理学の展望と課題」というテーマで、筆者が企画・司会、報告者は中国、韓国から各1名、日本から筆者、そして指定討論者をアメリカから1名依頼し、無事終了することができた。この大会期間中、フィードラーが76歳で日本式の数え年でいうと77歳で喜寿に相当するところから、筆者が企画してフィードラーの喜寿をお祝いする会食をサンフランシスコ・ダウンタウンのイタリア料理店で開いた。アメリカ、フィリピン、日本(筆者)などフィードラーから親しく教えを受けた研究者でフィードラーを囲んで楽しく食事し、お祝いをすることができた。

会議後筆者は家内とともにシアトルを再訪した。フィードラー夫妻はわれわれをワシントン州の“Westrek”(“West” + “Trek”、“trek”とは牛車のこと。園内をゆっくりと回る電気自動車に牽引された車の列に観光客を乗せて案内する)に案内してくれた。かなり広い庭園内の動植物をでき



白樺三四郎 (しらかし・さんしろう)

○ 1936年生まれ、九州大学教育学部卒業、九州大学大学院教育学研究科修士課程・博士課程修了、教育学博士。西南学院大学、鳴門教育大学、大阪大学、甲子園大学を経て、現在大阪経済大学人間科学部客員教授・大阪大学名誉教授。主著として「リーダーシップの心理学」(単著)、「産業・組織心理学への招待」(編著)、「社会心理学」(共編著)、「メンタルヘルスへのアプローチ」(共編著)、「リーダーシップ理論と研究」(訳編)、「リーダーシップの統合理論」(訳編)など。

る限り自然に近い状態で保存・管理し、公開している。入園するときフィードラーは複数の双眼鏡をバッグの中から取り出した。そのうちの1つは上記1979年ティリカム・ビレッジ・ツアーカーの船上で筆者らが差し上げたプレゼントであった。フィードラーが長年それを大事もっていてくれたのである。見物、昼食をすませ、園内から出るとき4人いっしょに写真を撮ろうということになり、フィードラーは近くにいた未知の男性にカメラのシャッターを押すことを依頼した。男性は気軽にその依頼に応じてくれ、撮影は無事終了した。このときフィードラーはその男性に向かって「明日のニューヨーク・タイムズを見てね」(われわれ有名人だからこの写真が新聞に出ているよ、というまったくのジョーク)と声をかけた。

フィードラーは2009年にパーソナリティ・社会心理学伝統創設賞を受賞し、日本式の数え年で88歳(米寿)となるので、筆者は両方のお祝いを兼ねて小さなお祝いの記念品を贈った。フィードラー夫妻は近年シアトルの自宅を出て、郊外のマーサ・アイランドの介護つき施設に入居している。2010年クリスマスに到着したカードに添えられた手紙によると、フィードラー夫妻は現在の施設における食事、住環境にも満足している。ワシントン州内のみならずボストンまで出かけることもある。

フィードラー先生ご夫妻のご健康とご長寿をお祈り申し上げます。

[完]

■はじめに

「平成 23 年度能力開発基本調査」(厚生労働省、2012)¹⁾の結果によると、「労働者全体の能力を高める」ことを重視する企業が昨年に引き続き増加していることが報告されています。「企業は人なり」「ものづくりは人づくり」のスローガンに代表されるように、成長・発展した企業は、事業を進展させる土台として、人を育てるということを大切にしてきました。事業立案、戦略策定、実行に携わるのは「人」だからです。

周知のとおり、グローバル化の流れの中で、日本企業を取り巻く環境は激変の時代を迎えています。政治、経済、社会、技術等、様々な非連続な変化が高速で起きており、企業組織はそれらに柔軟に適応していくなければなりません。海外を含めた他社との連携、分社化、海外への拠点拡大を図るなど、非常に速いスピードでダイナミックな展開が行われています。

このような状況変化の中、人材の育成においては、従来より慣習的に実施されてきた OJT や OFF-JT²⁾ を踏襲するという画一的な方法だけでは、即応しきれなくなっています。それぞれの企業では新たな人材育成システムの開発に取り組んでいるのが昨今の実情としてあげられます。とりわけ、グローバル化への対応力の養成は多くの企業で新たな課題となっています³⁾。

■依頼者のニーズをつかんで専門性を

発揮する仕事

私の日々の業務の中心は企業経営者、人事管理者の方とともに知恵を絞りながら、人材開発に関する問題、課題解決への取り組みをサポートさせて頂くことです。具

到達目標をしつかり定め、成果を確実に出す

石橋里美



いしばし・さとみ
●応用心理士・産業カウンセラー・キャリアコンサルタント。
青山学院大学文学部卒業後、大手メーカー営業、人事の経験を経て信州大学大学院人文科学研究科修了。芝浦工業大学、東京国際大学、鎌倉女子大学にて産業・組織心理学、キャリア・デザインの講師を務める。著書『キャリア開発の産業組織心理学ワークブック』ナカニシヤ出版。

体的にはプロジェクトチームの一員として、従業員意識調査・業務遂行能力の測定→教育研修制度の構築→各教育プログラムの開発・提案→各プログラムの実施・運用→投資対効果の検証・新たな課題発見→報告書の作成→経営管理者への報告、というような流れで進めていきます。

私事で恐縮ですが、本稿執筆をきっかけとして、改めてこれまでの約 7 年間の働き方を振り返りました。このような仕事で、成果を出していくために心がけてきたことは、次のようにまとめられます。

①最初の段階で、依頼者の“期待、すなわち自分に求められる役割と到達目標”をしっかりと理解する：

依頼者の期待（真に望んでいること）とは違った方向に向かって業務を遂行してしまっては、いくら頑張っても成果を出すことはできません。依頼者を理解するために、カウンセリング・マインドや傾聴が重要となります。

②関係者と綿密なコミュニケーションを図り短期間で信頼関係を築く：

プロジェクト型の仕事は、長期にわたって繰り返される業務ではなく、一定期間内において完成させるものです。業務完了後には解散する選抜メンバーとの信頼関係を短期間で築く必要があります。そのためには、自分の“立ち位置”を把握したうえでの、Web（メール・SNS 等）、対面の両方を駆使したコミュニケーションが必要となります。

③現場を理解し、学んだことを実践し

成果を出す：

研究から学んだことや成功したビジネスモデルの理論から、どんなにすぐれたプログラムを提案できたとしても、それが実践できなければ、貢献は“ゼロ”です。現場の組織や制度を理解して、実現可能性と効果的な運用のための具体的アクションプランを作成することが必要となります。例えば、大規模企業で新たな取り組みを浸透させる場合には、効果的な社内外への伝達方法、広報資料や社内各運用マニュアルの作成などに至るまで携わることもあります。

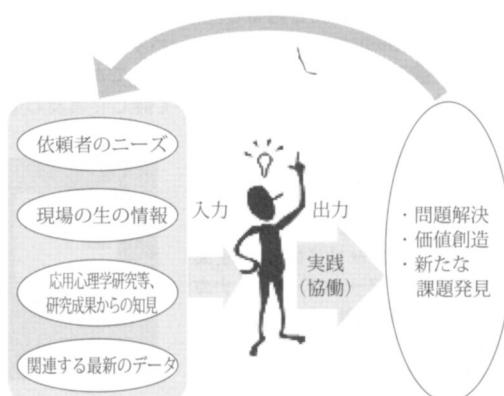
④ Learn · Learn · Learn :

心理学的視点を活かして、現実的な問題への解決策を提案し、新しい価値を生み出していけるように、絶えず入力情報を更新し、研究と実践において学び続けることが必須です（図参照）。また、実践の成果を検証して研究としてまとめ、知を蓄積していくことも忘れてはなりません。現実にはこの部分が不十分である点が私の課題です。

■大学から仕事（職場組織）への橋渡し

企業組織の人材開発に携わるとともに、現在、非常勤講師として3つの大学で産業・組織心理学、キャリア・デザインの授業を担当しております。授業は各大学とも一般教養科目としての位置づけです。文系、理系、教育系、多様な学生と向き合う講師としての基本姿勢は、基礎的な学問知識をきちんと伝えるとともに、大学から仕事（職場組織）へのかけ橋となることです。

2011（平成23）年1月、中央教育審議会は、「仕事に就くこと」に焦点をあて、「分野や職種にかかわらず、社会的・職業的に自立するために必要な基盤となる能力」を提示しました。この「基礎的・汎用的能力」は、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力要素からなります。「実践のための学問」「実践としての学問」とされる応用心理学、産業・組織心理学は性質上、その知見には社会人として生きていくために必要なことや役に立つテーマで溢れています。例えばギルフォード（1897-1987）による「収束的思考と拡散的思考」を区別した知能の構造モデルからは、今、産業界からも求められている「自ら問題、課題を発見し解決する能力」「新たな価値や解を創出するイノベーション人材」（経済産業省・文部科学省、2012）の土台となる創造性を働かせるための思考パターンを学ぶことができます。その他「自立」「モチベーション」「リーダーシップ」「ストレス対処」などの理論、学説は、いずれも「どのように生きていくのか、働いていくのか」「どのように社会に、仕事に働きかけていくのか」を考えるうえでの重要なヒントを与えてくれます。半期15回（1350分）の授



業の中では、テーマに関するワークや時事問題を取り入れ、学生が自分自身の感じ方、考え方を整理し、納得しながら学んでいくことができる参加型の授業をめざしています⁴⁾。

■応用心理士として

私の応用心理士としての原点は、内藤哲雄先生⁵⁾の指導による実験社会心理学の学びにあります。内藤先生は論理的であること、実験室実験での独立変数の操作、剩余変数の統制の厳密性などを徹底して指導くださいましたが、それ以上に、「感性」を大切にすることを伝えてくださいました。「自分を第一被検者にして“感じなさい”」「人は言葉にできる以上のものを感性で捉えている、それを“探りなさい”“つかみなさい”」と。これらの教えが、実践面で様々な立場の方と関わりながら、現場に潜む問題を明らかにし、解決へ向けて業務を遂行していくプロセスで、非常に役に立っていると感じています。

(山積みとなっている日々の業務課題を隣にそっと置いておいて、本稿をきっかけとして)これから応用心理士としての、新たな課題を明確化するために、神作博先生⁶⁾が第74回応用心理学会で提示された「応用心理士としての留意点」を引用いたします。

- ①人から信頼されること
- ②適切な話し方、言葉づかい、説得性のある話し方の可能したこと
- ③適切なプレゼンテーションの可能したこと
- ④広範囲な知識を有すること
- ⑤柔軟な思考を有すること
- ⑥円滑な対人関係樹立のしかたを身につけていること
- ⑦ネーミングの効果をよく認識している

こと

- ⑧カウンセリング的発想と仕事の進め方を熟知していること
- ⑨現場に足を運び、現場（含ふんい気）をよく観察すること
- ⑩現場の人との面談、意見の聞き取りを十分にすること
- ⑪その際に“他人的”にならぬこと
- ⑫職場に立ち入っても“違和感”を感じさせぬようにすること、応用心理士も含めて職場の“一体感”を醸成するように心掛けること

12項目を自己チェックしてみたところ、○がつけられそうなのは甘めにみて3つほどでした。自己研鑽し応用心理士としての行動習慣を身につけて参りたいと改めて思っています。

- 1) 「能力開発基本調査」は、国内の企業・事業所と労働者の能力開発の実態を、正社員、正社員以外別に明らかにすることを目的としています。
- 2) OJT (on-the-job-training) は仕事の現場で、上司や先輩などの指導のもとで一定の仕事を遂行しながら、経験を通して、職務能力を高めていくことです。これに対して OFF-JT は「職場外研修」と呼ばれ、職場を離れて社内の担当部署が考案したメニューや外部の研修機関が作成したプログラムを受講し、必要な知識やスキル習得を図るものです。
- 3) (社)日本経済団体連合会は「グローバル人材の育成に向けた提言」(2011年6月14日発表)でグローバル化に伴う人事戦略の必要性について詳しく言及しています。
- 4) 学生とともに進展させてきた授業内容を、ワークブック形式のテキストとしてまとめていただきました。(『キャリア開発の産業組織心理学ワークブック』、ナカニシヤ出版、2012年10月公刊)
- 5) 信州大学名誉教授・福島学院大学福祉学部教授。
- 6) 中京大学名誉教授。



日本応用心理学会認定「応用心理士」 資格認定申請のご案内

「応用心理士」事務局

本誌の「応用心理士の現場」では、応用心理士資格を生かして活躍する会員の皆様をご紹介しています。多種多様な分野で心理学の知見を発揮される会員が1人でも多くなりますよう、ぜひ資格の取得をお勧めします。

本資格申請は、「学会入会後2年を経た」時点で可能です。

学会で認定する「応用心理士」は、会員の専門職としての資質があると認められた証明になります。

認定の要件は、「応用心理士」資格申請の手引き(第6版)に記載の通りですが、次の各号の1つに該当するかを踏まえ委員会で認定するものです。

- (1) 学校教育法において定められた大学または大学院において、心理学専攻又はこれに準ずる分野を卒業あるいは修了した者(学位授与機構の審査により学士の学位を授与された者も含む)。
- (2) 本学会機関誌「応用心理学研究」に1件以上の研究論文を発表した者、又は本学会の年次大会において2件以上の研究発表をした者。
- (3) 認定審査委員会が応用心理学と関係あると認めた専門職で、3年以上の経験を有する者。
- (4) 応用心理学と関係ある職で3年以上の経験を有し、本学会研修委員会企画の「研修会」に5回以上参加した者。

■ 資格申請の手続き

以下の順序に従って申請の手続きをお願いします。

- ① ハガキで「資格申請書類を希望する」と「返送先」を明記し、事務局まで請求してください。
- ② 申請書類の請求がなされると、必要書類が希望者に送付されます。受け取られたら、

申請書類に所要事項を記入し、同封の封筒で送付してください。

- ③ 審査料10,000円は、郵便為替で送金してください。

郵便振替の振込先

口座番号 00110-6-359059

加入者名 日本応用心理学会

(注) 申請書類一式のなかに同封されている郵便為替用紙をご利用ください。

- ④ 提出する申請書類は次の通りです(提出の際確認してください)。

- ① 様式1(資格認定申請書)

(注1) 所定の枠内に証明書用カラー写真(ヨコ3cm×タテ4cm)を貼付してください。

(注2) 裏面に審査料の振込金受領証をコピーして貼付してください。

- ② 様式2-1(履歴書)

- ③ 様式2-2(業績書)

④ 「研修会」参加を資格要件とする場合は、「受講証明書」5回分を添付してください。

- ⑤ 認定委員会では、提出書類について審査し結果を文書にて申請者に通知します。

合格した人は認定料30,000円を納入してください。

入金されると「応用心理士」認定証を交付し、本学会機関誌「応用心理学研究」に掲載して公表します。

2013年度前期の受付締め切りは、5月末日です。

2012年度後期は、締め切りを2013年1月31日まで延期しています。まだ間に合います。申請をお待ちしております。

日本応用心理学会認定「応用心理士」事務局

〒169-0075

東京都新宿区高田馬場3-8-8

株式会社国際文献社内

E-mail: ukiya@fuji.email.ne.jp

機関誌編集委員会からのお知らせ

日本応用心理学会会員の皆様方には、日頃より本学会機関誌「応用心理学研究」に関し、多大なご支援とご協力を賜り、感謝申し上げています。今期から、前任の川本利恵子先生から機関誌編集業務を引き継ぎました深澤伸幸と申します。まずは紙面を持ちましてご挨拶させていただきます。

さて、編集委員会において最も基本となる査読業務の推進方法に関しまして、まずお伝え申し上げます。査読管理方法は当面の間、前期の6部門の査読体制をそのままに維持しますが、機関誌編集委員会のメンバーには新しい方々にも入っていただき、新メンバーで臨みます。

今期の機関誌編集委員会の業務は、大きく分けて2つのテーマがあると考えています。
①査読業務の迅速化と、投稿者自らが投稿論文に対する審査状況を隨時閲覧できるという、情報開示に関わるもの

②発言し行動する学会を目指し、現在査読作業を担っている6つの査読部門から、今日的なテーマを提案していただき、特集号を刊行し、社会的なオピニオンリーダーを目指すもの
上記①に関しましては、最近審査状況への問い合わせが多くなり、調査し回答するまでの業務が多発し、円滑な編集作業への支障をきたしています。投稿者自らが審査状況を知りたいとする希望が強くなってきてることへの対策もふまえ、すべての情報を編集事務局経由として、情報の流れを一元管理することにしました。従来は、編集委員会から査読部門の責任者に転送した後は、定期的に進捗状況の報告を求めていましたが、査読部門からの報告が出てくるまで、査読管理状況が当事者以外誰もわからないという状況が生じ、時として査読期間が延びるという事態も発生しました。この反省もふまえ、電子投稿システムの導入を決定しました。2013（平成25）年4月運用開始を目指し、

現在準備中です。

電子査読システムの導入は、他の学会でもすでに多数運用されており、特段目新しいものではありませんが、会員サービスのいっそうの充実に寄与できると考えています。さらに投稿者の負担軽減と、初稿校正時における文字数オーバーのトラブル（主に短報原稿）を事前に回避するため、原稿テンプレートでの原稿作成を、投稿希望者へ要請することになります。

運用までの周知手続きは次の通りです。

- (1) 平成24年度日本応用心理学会第79回大会（北星学園大学）9月22日総会席上、次年度4月より電子査読システム導入を報告
- (2) 機関誌「応用心理学研究」38巻2号において、「応用心理学研究」投稿査読システムを掲載（12月中旬、英文特集号と共に38巻2号を会員配布予定）
- (3) 12月中旬に、本学会HP上でも、電子査読システム概要をアップする予定

投稿を希望される会員の皆様は、今後大幅に投稿手続きが変更になりますので、ご留意下さい。

上記②に関しましては、現在部門ごとに今日的テーマを立てるための企画案を鋭意取りまとめ中ですので、目途がたった時点で、改めて会員の皆様にお伝えしたいと考えています。

前年度に計画された案件を確実に実行すると共に、次年度から編集委員会の業務スタイルが大幅に変わりますので、ご期待下さい。

最後に、電子査読システム導入までの期間で留意すべき点は、原稿送付先についてです。

■ 投稿論文の送付先：

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3-8-8

株式会社 国際文献社内「機関誌編集事務局」

■ 問合せ先：深澤伸幸（機関誌編集委員長）

e-mail : n-fukazawa@fuji.ac.jp

事務局だより

日本応用心理学会の入会申込書を次にご案内しますので、入会を希望する方はお申し込み下さい。
このページをコピーし必要事項を記入して、下記事務局宛までご郵送下さい。

日本応用心理学会入会申込書（正会員用）

申込年月日 (20 年 月 日)

フリガナ	推薦者(正会員)		
氏名	印		
ローマ字		性別	男 女
		生年月日	19 年 月 日
現住所	〒 _____		
	電話番号	()	
最終学歴	[年 月] 【在学中のものではなく、卒業あるいは中退・修了したもの】		
所属	名称		
	所在地	〒 _____	電話番号 ()
	職名・身分		
研究領域			
メールアドレス			
備考			

●記入上の注意

- 楷書で正確に記入して下さい。
- 正会員の入会資格は、会則第4条第2項に次のように定められています。
 - 4年制以上の大学で心理学およびその隣接分野を専攻した者
 - 第1号に準じる者
 - の隣接分野とは以下の分野を指しています。
教育学、児童学、人間関係学、体育学、社会学、社会福祉学、芸術学、宗教学、医学（心身医学、精神医学、行動医学など）、看護学、経営学、認知科学（人工頭脳など）、人間工学、など。
- (1)の入会資格に該当しないと判断される場合は、備考欄に高等学校卒業後の学歴および職歴をできるだけ詳しく書いてください。(2)の第1号に準じる者と認めることができるかを判断する資料とします。記入欄が不足したときは別紙に書いて添付してください。
- 社会人学生の場合には、在学大学（大学院）名等詳細を備考欄に記入してください。
- 推薦者には、必ず、署名のうえ捺印してもらってください。
- 推薦者がいないなどの相談がある場合は、学会事務局にご連絡ください。

日本応用心理学会事務局：〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター 株式会社 国際文献社内
電話：03-3389-6491 FAX：03-3368-2822 E-mail：jaap-post@bunken.co.jp

事務局受付〔 〕 審査〔 〕 本人連絡〔 〕 会費納入〔 〕

広報委員会（五十音順）

委員長	浮谷秀一	東京富士大学
副委員長	軽部幸浩	駒沢大学
委員	内山伊知郎	同志社大学
	木村友昭	MOA 健康科学センター
	松田浩平	東北文教大学

編集後記

「応用心理学のクロスロード」ができあがりました。年1回の刊行になったことで、扱う内容が多彩な広報誌になりました。いかがでしょうか。

今年は選挙で役員を選ぶようになってから3代目の理事長が4月に誕生しました。そこで学会の方向性を占う意味で、理事長と名誉会員との座談会を企画しました。参加していただいた名誉会員のなかの大村先生は、日本応用心理学会の生き字引のような方であり、同席した名誉会員である荻野先生と玉井先生との顔合わせによって、応心についての楽しい話が伺えました。新たな知識が得られたのではないかでしょうか。ただ時間が短く十分話を伺えたとはいえないませんでした。もっと時間をかけて詳しくお話しを伺うことができれば、座談会のテーマであった「応心の昨日を知り、明日に生かす」をより明確にできるのではないかと思います。次の機会を楽しみにしてください。

2011年3月11日に起きた東日本大震災、あれから多くの時間が経過したのにもかかわらず、原子力発電所の事故と重なったこともあり未だに復興があまり進んでいません。被災地の現状を伺うたびに心苦しくなります。応心としてできることをしようという森下前理事長の発案によって研究補助をすることになり、その成果が今回報告されています。復興への援助の仕方にはいろいろあるなと感じられたと思います。応心としてできたことはわずかだったかもしれません、このような研究成果が積み重なることによって、被災地の復興に少しでも役立つことができれば価値ある一步といえるでしょう。

応心の年次大会は2013年で第80回を数えます。年に2回開催されたこともあります、大会の年次回数としては心理学ワールドでは最も多くなっています。創立からの年数でも日本心理学会とほぼ並び、長い歴史を刻んできました。その歩みの過程で、多くの単科学会が発足しました。それらの学会はおののおのの分野で有意義な研究を積み重ね、すばらしい発展を遂げ続けています。日心は、多くの単科学会の研究テーマをカバーするとともに、それらの分野で構成されている大きな学会という印象があります。それに対して応心は、裾野を広く広げ幅広い分野をカバーすることを基本的な考え方として発展してきたといえます。そのことは逆に応心として目指しているものを曖昧にしているともいえます。しかし、そこに応心として存在感があり大きな価値があるともいえます。応心は、心理学ワールドにある多くの研究分野の橋渡し的な役割を担っているのです。多くの分野の研究者、特に若手研究者が自由に参加できる研究環境を提供できることが応心の役割といえるかもしれません。

皆様がこれを読んでいるときは、新しい年が明けていると思われます。皆様にとって2013年がすばらしい年になることを祈念して編集後記といたします。

応用心理学のクロスロード Vol.5

(年1回発行)

編集・発行 日本応用心理学会

〒162-0801
東京都新宿区山吹町358-5
アカデミーセンター 株式会社 国際文献社内
TEL 03-5389-6491
FAX 03-3368-2822
E-mail jaap-post@bunken.co.jp
HP http://jaap.jp

編集協力・製作 福村出版株式会社

デザイン 公和図書株式会社デザイン室

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

2012年12月27日 発行

原稿募集

『応用心理学のクロスロード』では、皆様の原稿を募集しています（執筆者の紹介・推薦も受け付けてます）。

● 募集コーナー

① 「ホーフ登場 クロスロードの星」

対象 応用心理学を研究中の大学院生
原稿字数 3000字以内（写真、図表を含む）

② 「大学探訪 研究室におじゃました」

原稿字数 4800字以内（写真、図表を含む）

③ 「職場探訪」

原稿字数 4800字以内（写真、図表を含む）

④ 「CROSSROAD ESSAY」

原稿字数 3000字以内（写真、図表を含む）

⑤ 「海外最新事情」

原稿字数 4800字以内（写真、図表を含む）

⑥ 「心理学から見たおすすめ DVD 紹介」

原稿字数 1300字以内（写真、図表を含む）

⑦ 「BOOK REVIEW 本を出しました」

対象 2011年7月～2012年7月の間に刊行
分の会員の書籍（自薦・他薦は問いません）

原稿字数 430字以内

⑧ 「応用心理士の現場」

原稿字数 4500字以内（写真、図表を含む）

⑨ 「その他」

本誌の感想・意見、日本応用心理学会へのメッセージなど

● 6号の原稿締切 2013年8月31日

（※7号以降に掲載させていただく場合もあります）

● 応募方法

原稿は、連絡先（住所、電話、メールアドレス、所属）を必ず明記して、お送り下さい。デジタルデータの場合はメール添付ファイルにてお送り下さい。掲載の採否については広報委員会で決定させていただきます。なお、お送りいただいた原稿は返却いたしません。予めご了承下さい。

● 送り先

[郵送]

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3-8-8
株式会社 国際文献社内

「応用心理学のクロスロード」原稿募集係

[E-mail]

ukiya@fuji.email.ne.jp

件名に「応用心理学のクロスロード」原稿応募と
お書き下さい。

心理学やその関係領域を専攻する学生と大学院進学希望者必携の書

新刊

心理学の基礎英単語帳

－心理学のための英語学習の手引－

羽生 和紀 著 A5判／730円
ISBN 978-4-87448-035-9

心理学を楽しく学習し、理解を深めるには、心理学の基礎となる約1000語の英語の専門用語を完全マスターすることが必要です。そのための英語学習の手引きを併せ持つと好評。絶賛発売中！

20年にわたって親しまれ、今も多数の心理学初学生が活用している書

必修1000

心理学基本用語集

必修心理学用語編集グループ A5判／525円
ISBN 978-4-87448-013-7

心理学を学ぶ学生に心理学必修の専門用語1000語をバイリンガルに編集。本書の用語を確実に覚え、学習効果を高めることを目的としている最高の評価を頂いています。全国の書店・購買部で好評発売中！

啓明出版

◆価格は定価（5%税込）です。

ご注文は最寄りの書店、購買部または小社にお願いします。TEL. 03-3307-2669
営業部 〒182-0004 東京都調布市入間町1-13-1 FAX. 03-3307-2676

新訂 ベーシック心理学

巣島行雄・羽生和紀 編 A5判／2,520円
ISBN 978-4-87448-021-2

こころの発達と学習の心理

岡村一成・浮谷秀一 著 A5判／1,870円
ISBN 978-4-87448-022-9

子どもの発達支援

山口勝弘・古屋義博 編 A5判／1,876円
ISBN 978-4-87448-030-4

増補 心の健康トウディ

佐藤誠・岡村一成・橋本泰子 編 A5判／2,100円
ISBN 978-4-87448-015-1

子どもの運動あそび

橋本妙子・堀内弓子 著 B5判／1,870円
ISBN 978-4-87448-025-0

基礎から学ぶ 犯罪心理学 研究法

犯罪心理学を研究テーマにしたい大学生へ

桐生正幸【編著】 犯罪者に出会わなくても犯罪心理学は研究できる！犯罪心理学の研究方法を、実際の卒業研究・卒業論文の事例をあげながらわかりやすく解説した大学生のための画期的テキスト。
◎2400円
A5判／並製／224頁
ISBN978-4-571-25042-2

I章 犯罪心理学とは
多様な犯罪心理学／犯罪学／心理学／犯罪者プロファイル／犯罪と犯罪心理学がわかる図書／TOPICS 研究のヒント①：理論

II章 データ収集と研究対象
卒業研究の研究計画を立てる／データの収集と尺度／研究資料の収集／研究対象者／具体例／TOPICS 研究のヒント②：ミーティング法

III章 研究方法
観察法／面接法／フィールド研究／質問紙法／実験法／心理検査法／TOPICS 研究のヒント③：目撃証言研究

IV章 結果
何が明らかになったのか？／図表作成／心理統計①／心理統計②／卒業論文の作成／TOPICS 研究のヒント④：裁判員裁判

V章 現代の犯罪
いじめ／少年の特異犯罪／振り込み詐欺

VI章 研究例
「犯罪不安」と卒業研究／「交通心理学」と卒業研究／「ポリグラフ検査」と卒業研究／TOPICS 研究のヒント⑤：犯罪者プロファイルによる卒業研究

基礎から学ぶ
犯罪心理学
研究法

桐生正幸

福村出版

〒113-0034 東京都文京区湯島2丁目14番11号
TEL 03-5812-9702 FAX 03-5812-9705
<http://www.fukumura.co.jp>

心の病の「流行」と 精神科治療薬の真実

ロバート・ウイタカー（著）
小野善郎（監訳） 門脇陽子／森田由美（訳）
◎3800円 ISBN978-4-571-50009-1

「既成事実」となっている薬物療法と、その根拠となっている「仮説」の意義と限界を様々な事例を使って提示した、衝撃的な警告の書。

新・消費者理解のための心理学

杉本徹雄（編著）
◎2600円 ISBN978-4-571-25040-8
消費者行動が決定・実行されるときの心理を理解する方法を、より現代社会に即した内容で解説した改訂版。

脳から始めるこころの理解

その時、脳では何が起きているのか

安部博史／野中博意／古川聰（著）
◎2300円 ISBN978-4-571-21039-6
こころに問題を抱えている時、脳で何が起こっているのか。日頃の悩みから病まで、こころの謎を解き明かす。

パーソナリティ心理学ハンドブック

日本パーソナリティ心理学会（企画）
二宮克美・浮谷秀一・堀毛一也・安藤寿康
藤田主一・小塙真司・渡邊芳之（編集）
◎26000円 ISBN978-4-571-24049-2
日本パーソナリティ心理学会 20周年特別企画。基礎から最新の研究動向までを網羅。前身の『性格心理学ハンドブック』刊行から15年、待望の新版出来！

2013年2月刊行！

◎=本体価格



青年期の心身の発達や学習過程に加え、今日的な課題や傾向についても取り上げ、教育方法や技術、生徒指導との関連やその基礎となるべき事項をドラマや再現シーンを用いて具体的に示し、教育心理の中核的な内容や事柄を分かりやすく解説します。

DVD カラー 各巻約30分
価格／DVD
各巻 63,000円(本体60,000円)
対象：大学、教育機関

①青年期の特徴 指導:三浦香苗(昭和女子大学教授)

青年期には身体や運動能力はもちろん内面的な精神構造にも大きな変化が生じます。その結果、文法や数学のような抽象的・論理的教科の学習が可能となり、自分を取り巻く現実や未来について批判的に考え、思考する世界も拡大します。また、大人の権威から離脱し、自立した人間になるよう努力し、新しい人間関係を構築しようとします。

大人への過渡期にある中・高校生の時期の青年の特徴について解説します。

⑥中・高校生の人格と情緒 指導:濱口佳和(筑波大学教授)

青年期には、新しい自己を求める旅に出、アイデンティティの探求を縦軸に、パーソナリティ形成も進んで行きます。人格の概念や主なパーソナリティ理論を紹介し、自己愛、主張性、攻撃性など、青年期のパーソナリティ形成にまつわるトピックを紹介します。孤独感や自己嫌悪感など、情緒的に不安定になりやすい時期でもあります。特に人恐怖心と抑うつ傾向を取り上げ青年期の感情面の問題についても解説します。

②動機づけとやる気 指導:大吉治(千葉大学准教授)

動機づけは学習に対する意欲、やる気などと言われ、どうすれば意欲がわき、やる気ができるのか、あるいは、どうして人は無気力になってしまうのか、教育心理学の中でも重要なテーマの一つです。

外発的動機づけ、内発的動機づけ、学習された無力感など動機づけに関する実験の紹介を通して、教育場面で動機づけを高めることの意味とその方法について考えてていきます。

⑦青年期の交友関係 指導:榎本淳子(東洋大学准教授)

青年期の友人関係は、親からの自立を支え、自己を獲得する過程で重要な役割を果たしています。中学生と高校生と大学生とでは、友人との関係の持ち方が異なります。その実際はどのようなものなのでしょうか。

青年期の友人関係の重要性とその機能と発達的变化を紹介しつつ、近年の友人関係の特徴についても再考し、教員は交友関係にどう関わるべきかを考えていきます。

③学習方法と評価 指導:岸学(東京学芸大学教授)

学習指導の活動をとらえるためには知識の獲得過程、学習方法、指導方法、評価方法の4つの視点からの理解が肝要です。知識の獲得過程では学習によりどのような知識・技能・態度などが獲得されるか、学習方法では学習者の視点に立った自己学習について、指導方法では指導者の視点に立った教授法と授業の実施方法について、評価方法では学習効果が上がる学習指導と評価活動について具体例を見ながら紹介します。

⑧教育とメディアの諸問題 指導:中澤潤(千葉大学教授)

マンガ、インターネット、携帯電話、テレビ等は、若者に大きな影響を与えていました。マンガを読むリテラシーについて解説し、また、正誤多様な情報が混合して提示されるテレビやインターネット等のメディアから、適切な情報を読み取るメディアリテラシーが重要なスキルであることを提示、情報を鶴呑みにするのではなく、批判的に検討することの重要性にも言及し、青年にとってのメディアとの適切な関係を考えます。

④学級の中の学習不適応 指導:桑田良子(樟葉学園大学教授)

学習活動の諸侧面で気になる、学習活動を円滑に進めることに困難をきたす、今後の学習に支障をきたすことが予想される生徒などを「学習不適応」生徒としてとらえ、その対応や関わり方について事例をあげて解説します。発達障害については、障害特性と認知特性を理解した対応の必要性を示します。また、「学習不適応」生徒への心理面の支援、進路問題への支援、学校体制の取り組みにも言及します。

⑨不適応と問題行動 指導:田中奈緒子(昭和女子大学准教授)

青年期の若者は身心、対人関係、社会的役割などで変化の中で、両親や教師など権威との葛藤、自己評価の揺らぎなど、様々な問題を抱えます。そして、その問題は、不適応や問題行動として顕在化することがあります。非行と不登校を取り上げ、その実態を概説し、彼らの心理状況について解説します。不適応と問題行動に関する理解と支援についても考え、合わせて具体的な支援がなされている現場での声も紹介します。

⑤自分探し 指導:笠井孝久(千葉大学准教授)

中・高校生の時期は、親や社会から与えられた行動基準ではなく、自分なりの行動基準で考え方行動し、社会との関係を築こうとします。さらに、身心や友人関係の変化、進路など、様々な変化や課題への対応が求められます。「自分づくり」・「自分探し」をキーワードに、事例を通して、青年期の自立へ向かう心性とそれらを理解する視点、発達を支援する教育的関わりについて解説します。

⑩若者の性行動 指導:福富護(東京学芸大学名誉教授)

第二次性徴の発現に象徴される性的成熟は、青年期の始まりを示す身体的な変化であり、青年の心理や行動に多大の影響を及ぼします。しかし、教育の場では、青年の性意識や性行動に対して抑制的な姿勢が根強く、十分な対応がなされていないのが現状です。教師として対応をするためには、性を考える視点を自ら確立させる必要があります。

現代社会の中で性意識や性行動を考えるための枠組みを、価値観との関連を含めて解説します。